岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 103

下長田上野古墳群・上野遺跡

一般国道313号犬挟峠道路
改築工事に伴う発掘調査

1995

建設省中国地方建設局倉吉工事事務所
岡山県教育委員会

序

一般国道313号は、鳥取県東伯郡北条町から岡山県勝山町を経由して広島県福山市に至る延長175㎞の陰陽連絡道路であり、これらの地域間の生活産業にとって重要な路線となっています。しかし、鳥取・岡山両県境の犬挟峠は、急勾配、急カーブの連続で交通のネックとなっており、また冬期間は除雪による車道幅員の確保が困難となるなど、鳥取県中部地域の発展に大きな障害となっています。

このような状況を解消するため、昭和62年度から建設省と鳥取県により犬挟峠の改良事業「犬挟峠道路」に着手したところであり、中部地域の発展の鍵となる同峠の一日も早い整備が望まれているところです。

ところで、犬挟峠道路事業予定地のうち、岡山県の最北端に位置する蒜山盆地ではルート上に遺跡が在するため、これの取扱について岡山県教育委員会と協議を重ねた結果、これらの遺跡については記録による保存措置をとることとなり、平成６年度から平成７年度にかけて岡山県教育委員会において調査が行われました。

これらの遺跡は当初古墳として周知されていたようですが、調査の結果石英を素材にした石器類が多く出土した先土器時代の遺跡や古墳時代の土器棺などが発掘され、この地域の歴史を考える上で大変貴重な遺構や遺物が確認されました。これらのことは、古代からの人々の営々とした営みとこの地域の豊かな風土を感じさせます。今回の発掘調査によって確認された多くの資料が報告書として取纏められ、当地域の文化財が保存されることとなったことに心から感謝申し上げる次第です。

終りに、発掘調査並びに本書の編集に当たられた岡山県教育委員会及び八束村を始め関係の皆様方に対しまして厚くお礼申し上げると共に、犬挟峠道路が一日も早く完成し、当地域の発展に寄与することを心から願うものです。

平成７年６月

建設省倉吉工事事務所
所長　西　田　和　昭

序

岡山県の最北端に位置する蒜山盆地は、県下三大河川の一つ、旭川の源にあたり、北を蒜山三座、南を中国山地の山々に囲まれています。蒜山三座の裾野には、蒜山高原と呼ばれる緩傾斜の丘陵や台地が広がり、ここに多くの遺跡が発見されています。なかでも国指定史跡の四っ塚古墳は著名で、古墳を管理する八束村では史跡の整備とともに博物館を建設し、文化財を生かした町づくりを進めております。

また、蒜山高原では四季を通じ自然の織り成す美しい景観が見られることから、多くの観光客が訪れています。最近では、蒜山大根やジャージー乳牛の育成にも力が注がれ、この地域の特産品として好評を博しています。

この地域では、県内外からの観光客の増大や特産品などの物資の輸送に対応できる道路網の整備が課題となっていましたが、平成４年に開通した中国横断自動車道岡山～米子線（落合、米子間）の完成によって一歩前進いたしました。しかし、日常生活においては鳥取県倉吉市とつながりが深く、一般国道313号のうち、特に難所となっています犬挟峠の改良が大きな課題として残っていました。

建設省は犬挟峠の整備着手を昭和62年度から計画し、それを受けて岡山県教育委員会は、中国地方建設局倉吉工事事務所と工事計画予定地に係る遺跡の取り扱いについて協議を重ねてきました。その結果、やむをえず破壊される部分については記録による保存措置をとることで合意し、平成６年度の確認調査に引き続いて平成７年度に全面調査を実施する運びとなりました。

下長田上野古墳群・上野遺跡は、当初１基のみの古墳として周知されていましたが、調査の結果先土器時代の遺跡も確認されました。先土器時代の遺跡は、厚く堆積した大山起源の火山灰層のなかに認められる、遠く鹿児島県から飛来した姶良火山灰層の下から発見されたもので、石英を素材にした石器類が多く出土しました。また、縄文時代と考えられる落し穴や古墳時代の土器棺、さらに古墳も新たに１基発見されています。こうした遺構・遺物はこの地域の歴史を考えるうえで、大変貴重であります。

この報告書が文化財の保護・保存、さらに地域の歴史を解明する一助となれば幸いです。

発掘調査の実施および報告書の作成にあたっては、一般国道313号犬挟峠道路改築工事に伴う埋蔵文化財保護対策委員の先生方から種々のご教示とご指導を得、また建設省中国地方建設局倉吉工事事務所や八束村役場をはじめ、関係各位から多大なご協力をいただきました。記して厚くお礼申し上げます。

平成７年６月

岡山県教育委員会
教育長　森　崎　岩之助

例　言

1、本報告書は、一般国道313号犬挟峠道路改築工事に伴い、建設省中国地方建設局倉吉工事事務所の委託を受け、岡山県教育委員会が1995（平成７）年度に発掘調査を実施した、下長田上野古墳群・上野遺跡の調査報告書である。

2、遺跡名は、1976年の分布調査で古墳が所在することから上野古墳と呼ばれていたが、1983年にはすぐ西側で石器を採集された白石純氏によって上野遺跡と命名された。しかし、白石氏は1994年に同じ遺跡を上野中遺跡第一地点とし、今回調査を行なった場所から少し北東側の石器採集地点を上野中遺跡第二地点とされた。また、岡山県教育委員会では当初下長田散布地と称して事業を進めた。このように遺跡名については統一を見ていないが、本書では丘陵先端一帯に遺跡が広がっているものと考え、字名から下長田上野古墳群・上野遺跡とした。

3、遺跡は、岡山県真庭郡八束村大字下長田字ウエノに所在する。

4、確認調査は岡山県古代吉備文化財センター職員松本和男が担当し、1994（平成６）年９月26日から10月３日まで行なった。

5、全面調査は岡山県古代吉備文化財センター職員平井　勝、谷本琢広が担当し、1995（平成７）年４月６日から５月９日まで実施した。その調査面積は361㎡である。

6、発掘調査および報告書の作成にあたっては、一般国道313号犬挟峠道路改築工事に伴う埋蔵文化財保護対策委員会を設け、下記の方々に委員を委嘱した。対策委員各位からは、終始有益なご指導とご助言をいただいた。記して深く感謝の意を表す次第である。

池上　博（久世町教育委員会社会教育課）　　小林博昭（岡山理科大学教授）
白石　純（岡山理科大学自然科学研究所）　　土居　徹（元　津山市立北小学校長）
新納　泉（岡山大学助教授）　　船津昭雄（元　久米町立中正小学校長）
水内昌康（岡山県文化財保護審議会委員）　　宗森英之（県立津山高等学校教諭）

7、本報告書の作成は、岡山県古代吉備文化財センター職員平井　勝、谷本琢広が担当し、1995（平成７）年度に行なった。

8、本書の執筆および編集は平井　勝が行なった。

9、本書の第２図に用いた地図は、国土地理院発行の二万五千分の一地形図（蒜山）を複製加筆したものである。

10、出土遺物ならびに図面・写真類は、岡山県古代吉備文化財センター（岡山市西花尻1325－３）に保管している。

11、発掘調査および報告書作成にあたり、下記の方々にお世話になった。記して厚くお礼申し上げる次第である。

難波　徹（建設省中国地方建設局倉吉工事事務所）、行田東洋治（八束村役場総務課）
稲田孝司（岡山大学教授）、光石鳴巳（岡山大学埋蔵文化財調査研究センター）、美甘隆夫
池田行夫、小椁清志、大美　明、丸山美砂子、高見美都子、志賀都子、小谷さか江、小谷勝子

目　次

序
例　言
目　次
第１章　発掘調査および報告書作成の経緯 …… 1
　第１節　調査および報告書作成の経過 …… 1
　第２節　調査および報告書作成の体制 …… 2
第２章　地理的・歴史的環境 …… 3
第３章　確認調査の概要 …… 7
第４章　全面調査の概要 …… 9
　第１節　遺跡の現状と層位 …… 9
　第２節　先土器時代の遺構と遺物 …… 11
　第３節　古墳時代の遺構と遺物 …… 16
　　１、土器棺 …… 16
　　２、古墳 …… 19
　第４節　時期不明の遺構 …… 22
第５章　まとめ …… 23
土器観察表 …… 25

図　目　次

第１図　遺跡の位置＜黒丸＞ …… 3
第２図　周辺の遺跡分布図
　（Ｓ：１／25000）…… 4
第３図　確認調査出土遺物 …… 7
第４図　確認調査のトレンチ位置図
　（Ｓ：１／500）…… 7
第５図　調査区位置図
　（Ｓ：１／1000）…… 8
第６図　土層断面（Ｓ：１／80）…… 10
第７図　先土器時代の遺物分布
　（Ｓ：１／150）と出土層位 …… 11
第８図　ブロックＡ・Ｂの石器類と
　接合関係（Ｓ：１／60）…… 12
第９図　ブロックＣの石器類と
　接合関係（Ｓ：１／60）…… 13
第10図　各ブロック出土の剝片 …… 14
第11図　接合資料(1) …… 14
第12図　接合資料(2) …… 15
第13図　縄文時代以降の遺構
　配置図（Ｓ：１／150）…… 16
第14図　土器棺１の出土状態
　（Ｓ：１／10）…… 17
第15図　土器棺１ …… 17
第16図　土器棺２の出土状態
　（Ｓ：１／10）…… 18
第17図　土器棺２ …… 18

第18図　1号墳（S：1／150）…… 19
第19図　1号墳の周堀断面＜G－H＞
（S：1／30）…… 19
第20図　2号墳の周堀断面
（S：1／30）…… 20
第21図　北側周堀土器4出土状態
（S：1／30）…… 20
第22図　北側周堀土器5出土状態
（S：1／30）…… 20
第23図　2号墳出土土器分布図＜アルファベットは断面の位置＞
（S：1／150）…… 21
第24図　2号墳出土土器＜土器番号の1～7までは土器分布図の番号と同じ＞ …… 21
第25図　土壙1（S：1／30）…… 22
第26図　土壙2（S：1／30）…… 22

図　版　目　次

図版1　1、遺跡の遠景（南西から）
2、作業風景（南東から）
3、Bトレンチ東壁の土層（西から）
図版2　1、ブロックAの石器類出土状況（北から）
2、ブロックBの石器類出土状況＜手前側＞（北西から）
3、ブロックCの石器類出土状況（東から）
図版3　1、土器棺1出土状況（東から）
2、土器棺2出土状況（南から）
3、1号墳全景＜手前の穴は土壙1＞（西から）
図版4　1、2号墳全景＜右側の穴は土壙2＞（北から）
2、2号墳の南側周堀断面＜A－B＞（西から）
3、2号墳の西側周堀断面＜C－D＞（南から）
図版5　1、2号墳の北側周堀断面＜E－F＞（西から）
2、土壙1（南から）
3、土壙2（西から）
図版6　1、姶良火山灰層直下の石器類
2、ブロックAの石器類
3、ブロックBの石器類
図版7　1、ブロックCの石器類
2、土器棺1＜上は蓋、下は身＞
3、土器棺2＜上は蓋、下は身＞
図版8　2号墳の周堀内出土土器＜番号は第24図の土器番号と同じ＞

第１章　発掘調査および報告書作成の経緯

第１節　調査および報告書作成の経過

鳥取県倉吉市を起点とし、岡山県勝山町を経由して広島県福山市に至る一般国道313号のうち、岡山県と鳥取県の県境に位置する犬挟峠は、交通の難所である。このため建設省は、1987（昭和62）年度から犬挟峠の整備に着手するとともに、倉吉工事事務所長名で、昭和62年５月１日付で岡山県教育委員会にたいし道路改築予定線（岡山地内）内の埋蔵文化財の所在等について照会を行なった。

これを受けて岡山県教育庁文化課は、遺跡地図での確認とともに道路改築予定線内の分布調査をも合わせて行ない、八束村下長田地区において先土器時代から古墳時代の遺跡を確認した。そして昭和62年８月26日付教育長名で、倉吉工事事務所長にたいし、下長田地区において遺跡が所在することから工事施行にあっては発掘調査が必要である旨の回答をした。

1997（平成９）年３月の共用開始が近づいた1993（平成５）年12月、倉吉工事事務所と文化課は、工事に先立つ発掘調査に向けての具体的な協議に入った。その結果、まず確認調査を行ない遺跡の性格や範囲を明確にしたのち全面調査を実施することとなった。

確認調査は、岡山県古代吉備文化財センターが担当し、1994（平成６）年９月26日から10月３日まで行なった。調査は周知されている上野古墳を中心に、その周囲に４本のトレンチを設定した。その結果、墳丘の削平された２基の古墳と土壙が確認された。

1995（平成７）年には、平成７年１月６日付倉吉工事事務所長名で教育長にたいし、埋蔵文化財発掘調査についての協議の文書が提出された。これに基づき協議を重ねた結果、1995年度事業として、発掘調査と報告書を合わせて行なうこととなり、平成７年４月３日付けで委託者建設省中国地方建設局長、受託者岡山県知事の間で発掘調査委託契約を締結した。

発掘調査は岡山県古代吉備文化財センターが担当し、２名の調査員で1995年４月６日から開始した。まず、表土を重機で除去し、表土直下で縄文時代以降の遺構を検出した。古墳は開墾によって墳丘を削平されているが、とくに調査区の南半分は姶良火山灰層直下まで削平されており、そこに位置する１号墳は周堀がわずかに残存するのみであった。４月17日からは縄文時代以降の調査と並行して、確認調査では確認されなかった先土器時代の遺跡について、さらに４本のトレンチを設定して確認に努めた。この内２号墳の中央を東西に向けて設定したＤトレンチで、姶良火山灰層の直下から多くの石器が出土した。このため調査区の北端から２号墳の南周堀までの間について、先土器時代の調査を実施した。その結果、３箇所のブロックを検出した。５月１日には国道313号犬挟峠道路改築工事に伴う埋蔵文化財保護対策委員会を開催し、委員各位から多くのご教示を得た。調査は対策委員各位のご教示を念頭に最終的な精査を行ない、５月９日に終了した。

調査終了後、岡山県古代吉備文化財センターでただちに報告書の作成にとりかかった。土器の量は多くはないが、石英製の石器の接合と実測には多くの時間を費やした。遺構・遺物のトレースも並行して進められ、原稿の執筆、割り付けをへて、６月30日に作業を終えた。

第２節　調査および報告書作成の体制

上野古墳群・上野遺跡の調査および報告書の作成は1995（平成７）年度に実施した。このうち発掘調査は４月６日から５月９日までを要し、引き続いて６月30日まで報告書の作成を行なった。事業にかかる岡山県教育委員会および岡山県古代吉備文化財センターの体制は下記の通りである。

岡山県教育庁

教育長	森崎岩之助
教育次長	黒瀬定生
文化課	
課長	大場　淳
課長代理	樋本俊二
参事（兼センター次長）	葛原克人
課長補佐（兼埋蔵文化財係長）	高畑知功
主任	若林一憲

岡山県古代吉備文化財センター

所長	河本　清
次長	高塚恵明
次長（兼文化課参事）	葛原克人
総務課	
課長	丸尾洋幸
総務主幹	守安邦彦
課長補佐（兼総務係長）	井戸丈二
主査	石井善晴
主任	木山伸一
調査第三課	
課長	柳瀬昭彦
課長補佐（兼第一係長）	平井　勝（調査担当）
文化財保護主任	谷本琢広（調査担当）

なお、発掘調査にあたっては、建設省中国地方建設局倉吉工事事務所ならびに八束村役場をはじめ、作業に従事された地域住民の皆様からは多大なご協力を得た。また、報告書作成においても江尻泰幸、川上陽子、三垣佐知子、阿部典子から援助を受けた。記して厚く御礼申し上げる次第である。

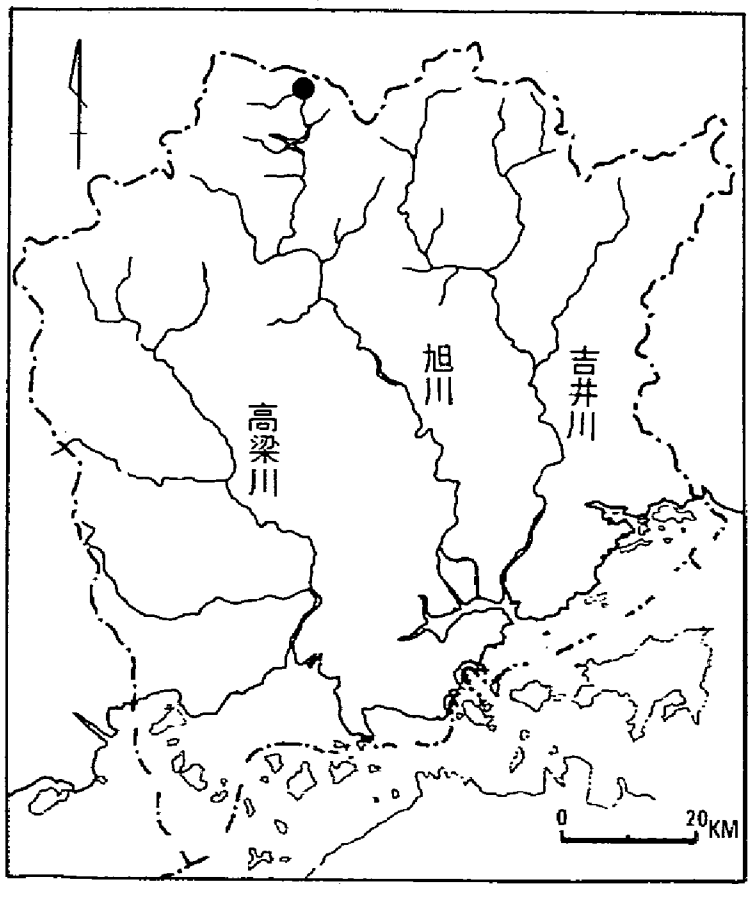
第２章　地理的・歴史的環境

岡山県真庭郡下長田に所在する上野古墳群・上野遺跡は、蒜山山地と中国山地とに挟まれた蒜山盆地の東部に位置する。蒜山盆地は南側の中国山地（真庭山地）と、北側の第三紀鮮新世最末期あるいは第四紀洪積世前期に噴出した蒜山火山群である擬宝珠山、上蒜山、中蒜山、下蒜山の間にある東西約20㎞、南北約８㎞の細長い盆地である。この盆地を形成する地域は、蒜山火山噴出前は中国山地の北側、すなわち山陰側にあった。その後蒜山山地の形成に伴い、中国山地との間に挟まれた凹地となったが、なお凹地の水は東から西へ流れ、日野川筋を通って日本海に注いでいた。

しかし、その後大山の噴火による火砕粒が凹地の西側をふさいだため、川は塞き止められて湖となった。この古蒜山原湖と呼ばれる湖は、その後たまたま山陽側から谷頭侵食を進めてきた旭川と繋がり、山陽側の水系に組み込まれるとともに、排水が進んで湖底は干上がり、さらに旭川の下刻によってほぼ現在の地形が形成された。

蒜山盆地の地形は、北側に連なる標高1100～1200ｍの蒜山火山群の裾野に広がる蒜山原と呼ばれる場所と、西から東に流れる旭川によって形成された沖積低地、そして南側に連なる中国山地の北麓に大別できる。このうち蒜山火山群の裾野に広がる部分は、緩やかな起伏を示しながら南下し、沖積低地に至って終わる。上野古墳群・上野遺跡はこの裾野の末端、沖積低地に接するところに立地する。

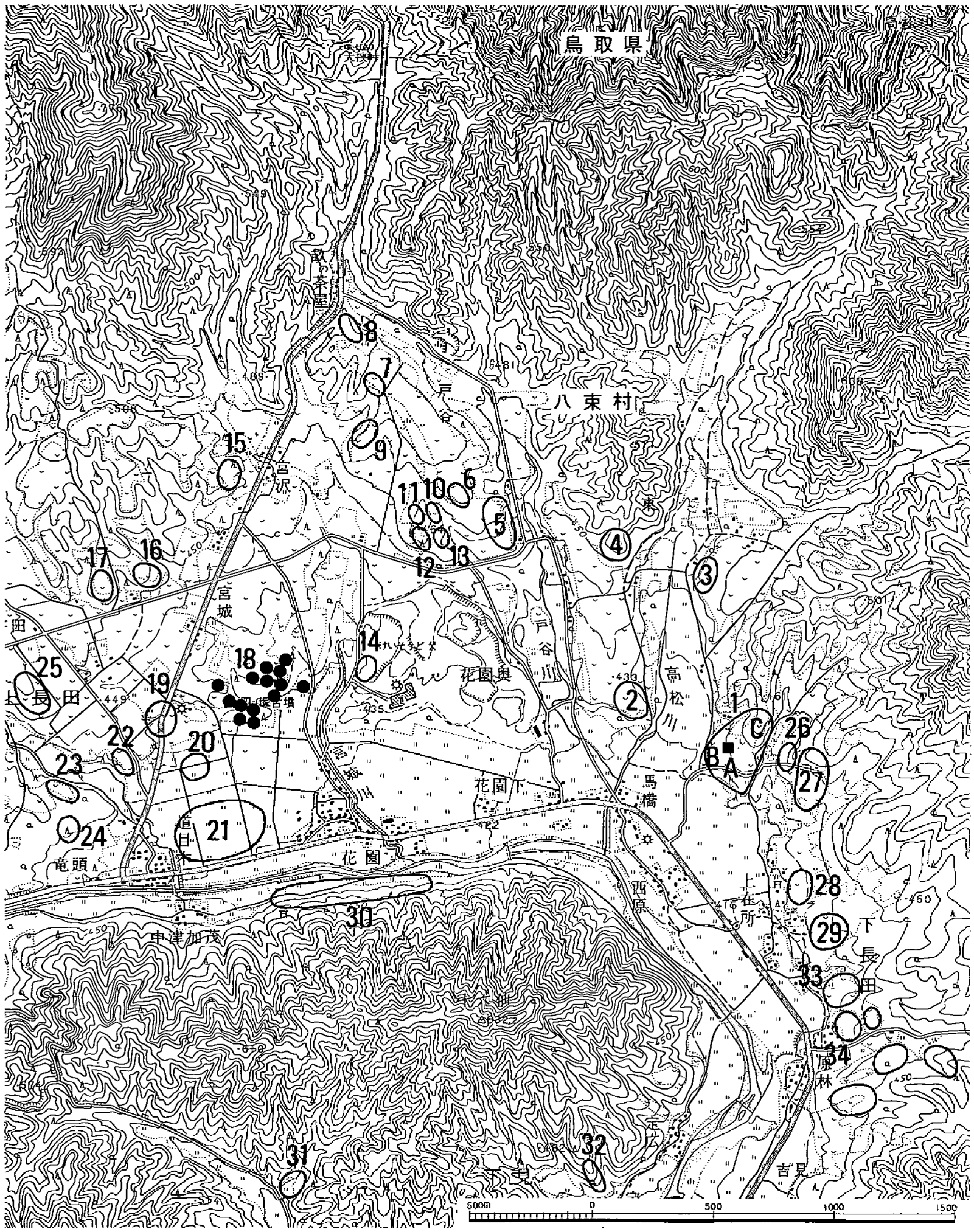
蒜山盆地は現在の行政区画でいうと、西から真庭郡川上村、八束村、中和村にあたる。三村は全県的にみて平地が広く、林野は山地の中としては少ない地域である。集落は海抜450ｍ前後の沖積低地に集中している。気候は、岡山市に比較して年平均気温が３度低く、夏は過ごしやすい。しかし、冬は北西の季節風が大山の西方から日本海側の雪を運ぶため、降雪が著しい。また、降水量も年1900㎜を超え、県南部の二倍あまりに及ぶ。



第１図　遺跡の位置〈黒丸〉

蒜山盆地では多くの遺跡が発見されているが、とりわけ先土器時代の遺跡は、厚く堆積した火山灰層中に良好な状態で残されていることから注目されている。先土器時代の遺跡の多くは、白石純氏の精力的な分布調査に負うところが多く、さらに鎌木義昌氏や小林博昭氏による発掘調査、また中国横断自動車道建設に伴い岡山県古代吉備文化財センターが行なった発掘調査によって具体的な様相が明らかにされつつある。

上野遺跡からはだいぶ西へ離れるが、盆地の南西部に所在する城山東遺跡、中山西遺跡、下郷原田代遺跡№２地点では、いずれも姶良火山灰層の直下から先土器時代の遺構・遺物が発見されている（註１）。城山東遺跡は標高514ｍあまりの丘陵上に立地し、石器類と炭化物のブロックが１箇所



1．下長田上野古墳群・上野遺跡（A．本報告書掲載調査地区　B．上野中１地点　C．上野中２地点）　2．東遺跡
3．東下遺跡　4．上野中遺跡　5．戸谷遺跡６地点　6．戸谷遺跡４・５地点　7．戸谷遺跡２地点
8．戸谷遺跡１地点　9．牧野遺跡５地点　10．牧野遺跡４地点　11．牧野遺跡２地点　12．牧野遺跡１地点
13．牧野遺跡３地点　14．上林経塚　15．笹畝遺跡１地点　16．笹畝遺跡２地点　17．笹畝遺跡３地点
18．四っ塚古墳　19．中野遺跡　20．一ッ塚古墳　21．花園新田遺跡　22．道目木遺跡　23．竜頭遺跡
24．道目木Ｂ遺跡　25．宇田遺跡　26．湯頭Ｂ遺跡　27．湯頭遺跡　28．上在所遺跡　29．長田神社東遺跡
30．中津加茂遺跡　31．山城Ａ遺跡　32．宝大寺遺跡　33．原林遺跡　34．林遺跡

第２図　周辺の遺跡分布図（S：1/25000）

検出された。石器類の石材はすべて黒曜石で、２㎝前後の貝殻状剝片の側縁を部分的に調整した小形のナイフ形石器が特徴的である。

中山西遺跡は標高530ｍ前後を測る丘陵上に立地し、石器類と炭化物からなるブロックが１箇所検出された。このブロックは径14.5ｍの範囲に分布するが、中央部が空白になるため環状を呈する。石器類の石材は石英が90％あまりを占め、次いで黒曜石が７％、これに安山岩が僅かに加わる。石器は小形のナイフ形石器が特徴的である。

下郷原田代№２地点は標高535ｍあまりの丘陵上に立地し、石器類と炭化物からなるブロックを３箇所検出した。石器類の石材はブロックによって異なり、ＡブロックとＣブロックが黒曜石、Ｂブロックは安山岩（サヌカイト）で構成される。石器は２側縁を加工した台形様のナイフ形石器や、２㎝前後の貝殻状の剝片に調整を施した小形のナイフ形石器、あるいは石斧などが見られる。

上野遺跡の所在する丘陵上においても白石氏によって石器が採集（註２）されており（上野中１地点・上野中２地点）、丘陵上の広い範囲に遺跡が広がっていることが推定されるが、さらに西側に広がる起伏の少ない丘陵上には多くの遺跡が確認されている。まず上野遺跡の西側を北から南に流れる高松川の西側丘陵上には東遺跡が、さらに西側を北から南に流れる戸谷川の上流部には牧野遺跡群と戸谷遺跡群が、そして旭川添いに走る国道313号が北に向かって大きく折れ曲がり、鳥取県境の犬挟峠に向かいかけた西側の丘陵上には竜頭遺跡が、さらに峠に向かって1.5㎞あまり進んだ西側の丘陵上には笹畝遺跡が所在する。これらの遺跡の多くは鎌木氏や小林氏等によって継続的に調査がなされ、先土器時代石器群の様相が明らかにされつつある。

戸谷遺跡群はこれまで五つの地点が調査されている。このうち第１地点では、漸移層であるⅡ層下部から黄褐色火山灰層（ソフトローム）のⅢ層上面において、礫群とともに切出し形ナイフ形石器、掻器、削器など、そして姶良火山灰層直下のＸ層（赤褐色火山灰層）からも礫群とともにナイフ形石器、掻器、削器、彫器、局部磨製石斧、楔形石器などが出土している。なお、石材はⅡ～Ⅲ層がサヌカイトを主体に黒曜石や碧玉を僅かに用い、Ｘ層は石英を主体に水晶、安山岩、三群変成岩、流紋岩が加わり、黒曜石も僅かに見られる（註３）。

ところで、戸谷遺跡第１地点のように、先土器時代の石器群が姶良火山灰層を挟んで重層的に出土した例は、蒜山盆地ではまだ少ないが、牧野遺跡第５地点（註４）や東遺跡（註５）、そして笹畝遺跡第１地点（註６）、さらに蒜山盆地東端に位置する中和村フコウ原遺跡（註７）では、姶良火山灰層より上の層から石器が出土している。東遺跡ではⅡ層（漸移層）から黒曜石製の細石刃・細石刃核、Ⅲ層（ソフトローム）からはサヌカイト製の尖頭器が、そして牧野遺跡第５地点でも同じくⅢ層からサヌカイト製のナイフ形石器、掻器、削器などが、さらに笹畝遺跡第１地点においても、ソフトローム層から安山岩や粘板岩製のナイフ形石器、削器、角錐状石器などが出土している。また、フコウ原遺跡ではⅦ層からサヌカイト製のナイフ形石器、掻器、削器などが発見されており、蒜山盆地が先土器時代の狩人の活動の場として、間断なく利用されていたことが窺われる。

縄文時代の遺跡は近藤義郎氏（註８）や鎌木氏（註９）、さらに白石氏（註10）等によって分布状況が明らかにされてきたが、調査された遺跡は少なく、資料に乏しい。そうした中にあって、早期の住居址４軒が発見された中山西遺跡（註11）は希有な例である。また、縄文時代と推定される落し穴が城山東遺跡と中山西遺跡と下郷原田代遺跡で検出（註12）されており、丘陵上での落し穴猟が盛んであったことが窺われる。

弥生時代の遺跡は先土器時代や縄文時代の遺跡に比べ、現状ではやや少なく、資料もさらに乏しい。ただ、中国横断自動車道建設に伴って調査した城山東遺跡と下郷原和田遺跡、あるいは下郷原田代遺跡では住居址などが発見されており（註13)、徐々に資料の蓄積が図られている。

古墳時代の遺跡も、古墳を除くと資料に乏しく、僅かに城山東遺跡と下郷原和田遺跡で住居址などが認められている（註14)。

これに対して古墳は蒜山盆地で150基近く確認されており、このうち八束村内には30基あまりが存在する。とりわけ上野古墳の西側２㎞に所在する四っ塚古墳群（註15）は著名で、近藤氏による調査と研究は高い評価を得ている。四っ塚古墳群は径10～20m前後の規模からなる古墳群であるが、どちらかというと径20mを超える古墳を主体としている。このうち埋葬施設が判明しているのは横穴式石室である１号墳と、木棺直葬の13号墳であるが、木棺直葬が多いものと推定される。古墳群の築造は５世紀代から始まり、古い形態の横穴式石室を有する１号墳が築造された６世紀の中頃には終わるものと考えられる。四っ塚古墳群が築造を停止したのちにも、周辺に横穴式石室が点在することから、引き続いて古墳の築造が行なわれていたことが窺われる。

蒜山盆地は古代の行政区画で美作国真嶋郡に属していたが、その時期の遺跡は少ない。ただ、土師器や須恵器が採集されている遺跡は多く、詳細に見ればその中に古代の遺物が含まれている可能性はあるし、また、城山東遺跡では奈良時代の主軸を南北方向に向ける総柱建物群が発見（註16）されるなど、乏しい資料であるが、古代社会の一端は垣間見れるようになった。

註

註１　下澤公明「第二章　蒜山地域の調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』93　1995

註２　堀川　純「蒜山高原採集の旧石器」『蒜山研究所研究報告』第８号　1983
　　堀川　純「蒜山原採集の旧石器(1)」『自然科学研究所研究報告』第20号　1994

註３　鎌木義昌・小林博昭「戸谷遺跡」『岡山県史』第18巻　1986

註４　鎌木義昌・小林博昭「岡山県牧野遺跡第５地点」『日本考古学年報』37　1986
　　小林博昭「岡山県中国山地ソフトローム期における剝片生産技術の一側面」『鎌木義昌先生古希記念論集・考古学と関連科学』　1988

註５　鎌木義昌・小林博昭「北京原人と同時代の原人がすんでいた」『ゼピロス』№４　1985

註６　註４の小林博昭論文に同じ

註７　註５に同じ

註８　近藤義郎『蒜山原―その考古学的調査―』　1954
　　近藤義郎『蒜山原四っ塚古墳群』　1992

註９　鎌木義昌「蒜山原の縄文時代遺跡」『蒜山研究所研究報告』第３号　1977
　　鎌木義昌「蒜山原遺跡群」『岡山県史』第18巻　1986

註10　堀川　純「蒜山原採集の縄文時代遺物」『蒜山研究所研究報告』第６号　1981
　　堀川　純「蒜山原採集の縄文時代遺物」『蒜山研究所研究報告』第７号　1982

註10～14　註１に同じ

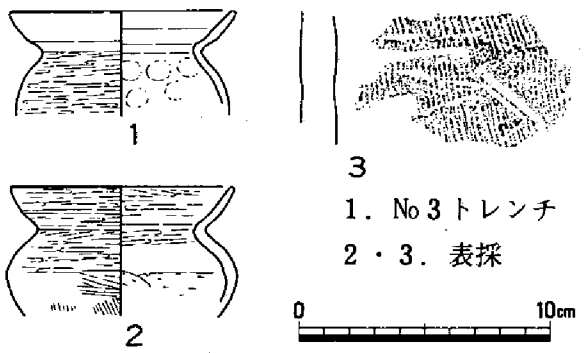
註15　註８に同じ

註16　註１に同じ

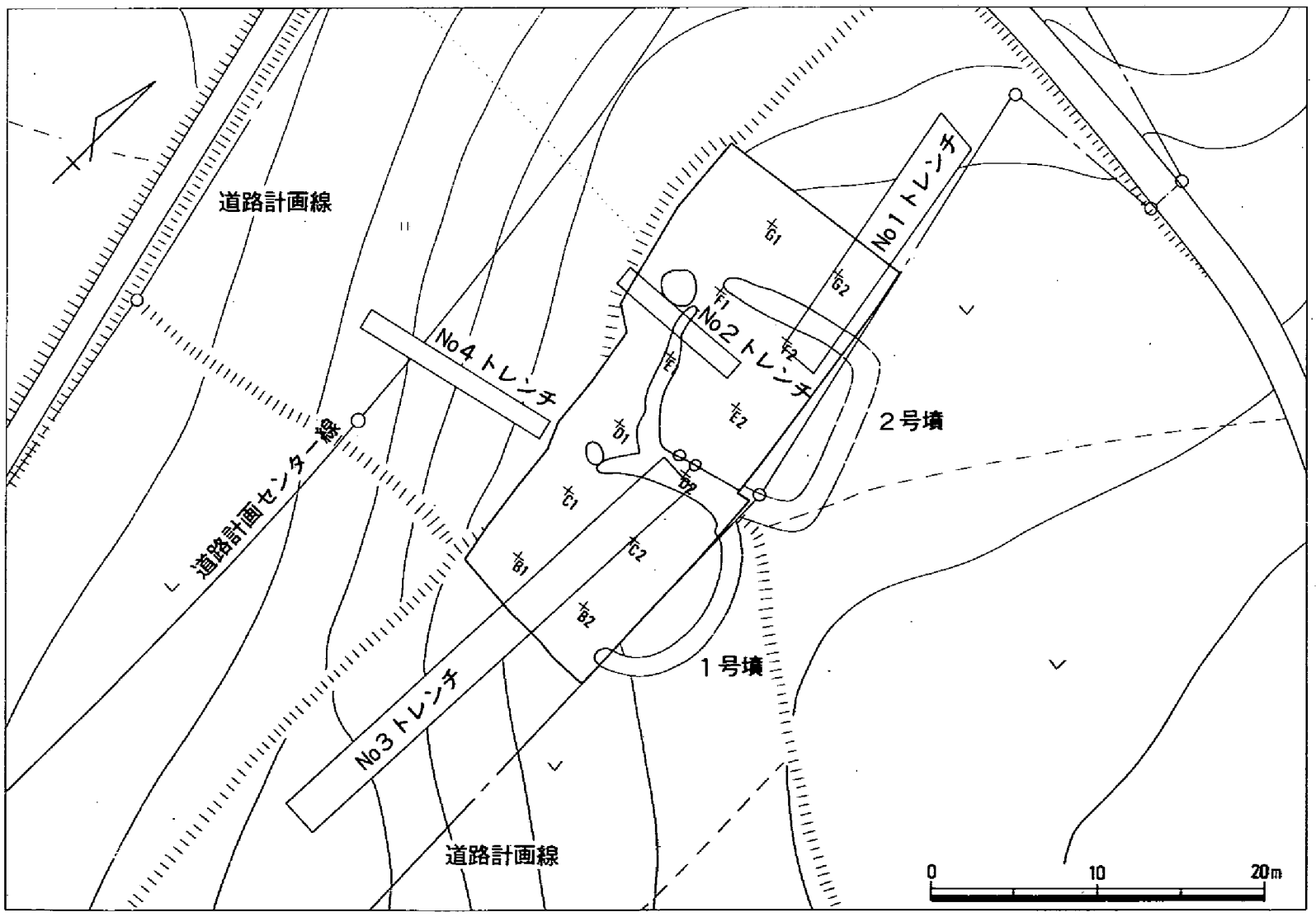
第３章　確認調査の概要

確認調査は1994（平成６）年９月26日から10月３日まで、岡山県古代吉備文化財センター調査第一課の松本和男（調査第一課課長補佐）が担当して実施した。

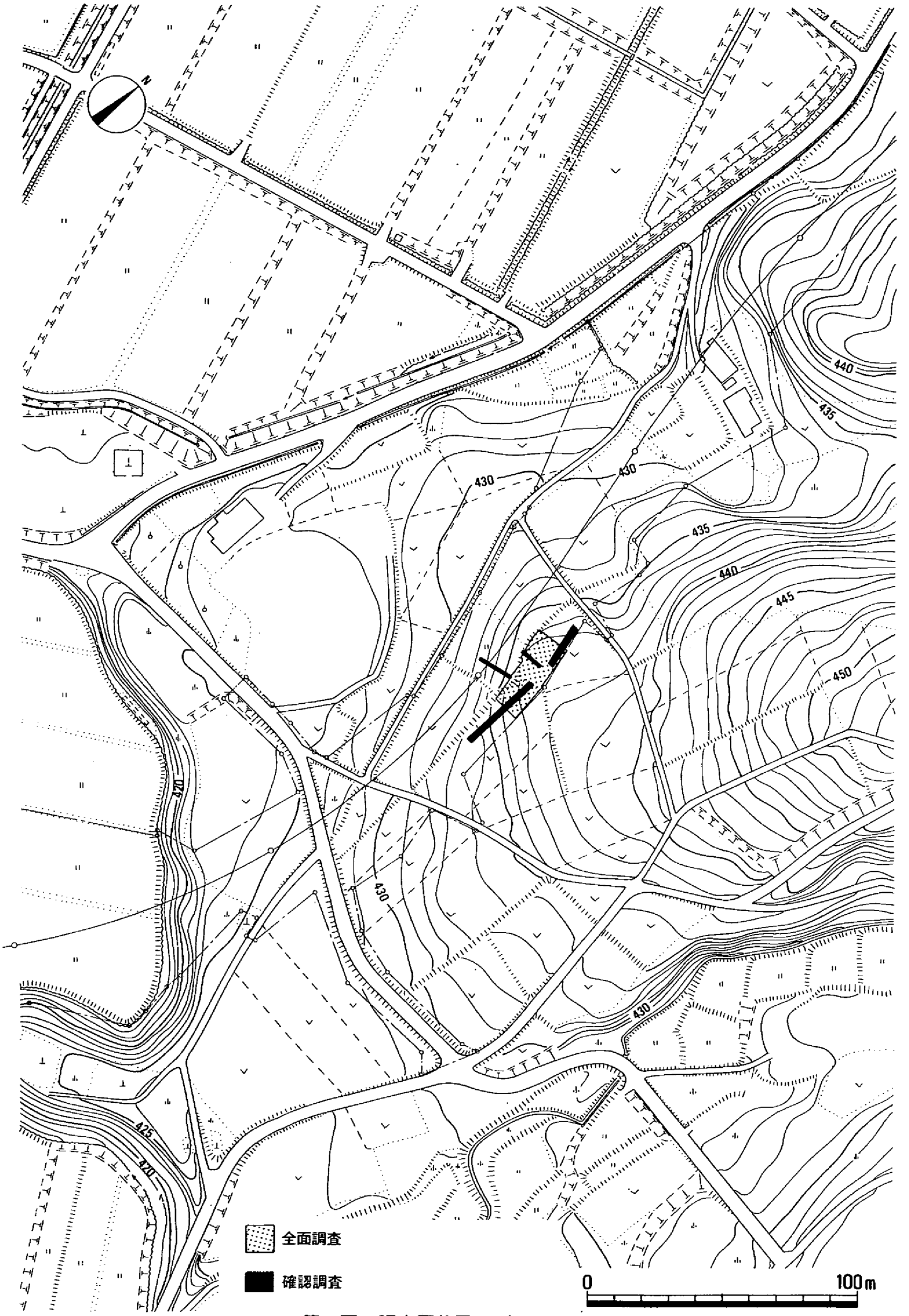
確認のトレンチは、周知されていた上野古墳を中心に、北側に延びるNo.１、西側に延びるNo.２、南側に延びるNo.３に加え、西側への広がりを確定するために古墳の西側に東西方向のNo.４を設定した。No.１トレンチでは、表土の黒ボコを除去するとトレンチの南端近くで溝が確認された。No.２トレンチにおいても、No.１トレンチの溝に比較すると幅が狭いものの、溝の一部が認められた。また、溝に近接して土壙も確認された。No.３トレンチにおいても、北端で溝が確認された。この溝はNo.１、No.２トレンチで確認された溝につながるものと考えられることから、10m前後の規模を有する古墳が推定された。さらに、道路計画予定地の東側にある崖面の断面に認められた溝から、もう１基古墳が存在するものと思われた。そこで北側に位置する前者を２号墳、南側に位置する後者を１号墳とした。また、No.４トレンチでは西に向かって急傾斜な斜面となる様子が確認されたことから、西側にはあまり遺構は広がらないものと推定された。



第３図　確認調査出土遺物



第４図　確認調査のトレンチ位置図（S：1/500）



第５図　調査区位置図（S：1/1,000）

第４章　全面調査の概要

第１節　遺跡の現状と層位

１、遺跡の現状

上野古墳群・上野遺跡は、北から南に向かって延びてくる丘陵の先端部に立地する。丘陵の先端部は緩やかな斜面が南側に向かって広がり、一部荒地もあるが、多くは畑地となっている。この緩斜面は標高440mあたりで終わり、ここから北に向かってやや急な斜面で尾根が続く。丘陵の東西および南側は水田が広がる平野部になる。道路予定地は南側の平野部から、丘陵先端部の西側を通りさらに北に延びる。

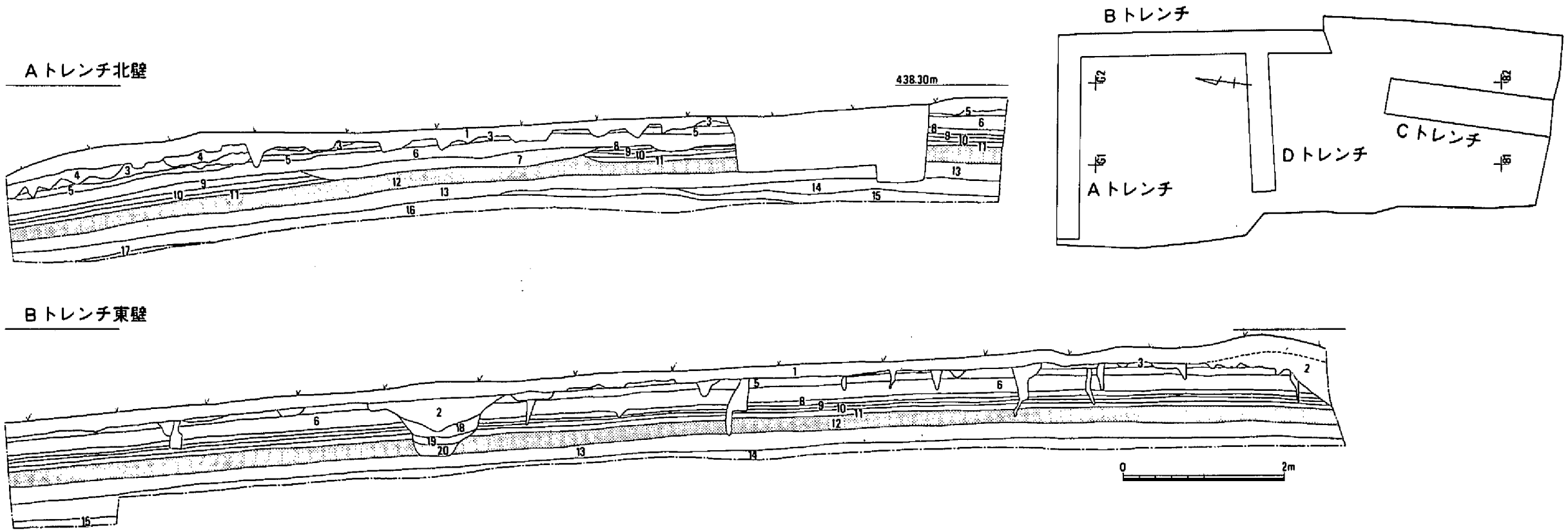
遺跡は丘陵上の緩斜面に広がるものと考えられるが、道路予定地にかかる部分は、その西端にあたる。ここは西に向かって少し尾根上の張り出しがあり、北側には小さな谷が入りこむ。西側は標高435mあたりから下側にかけてやや傾斜が急になる。調査範囲は道路予定地の東側に接する、南北30m、東西12m程で、その少し北寄りに上野古墳は所在する。

上野古墳は1976年に、わずかな高まりと埴輪が認められたことから古墳とされていたが、現在では墳丘らしい高まりはなく、また調査範囲のほぼ中央部から南側は姶良火山灰層まで削平されていることから、残存状況はよくないものと思われた。

２、層位

調査区内の地形はＢトレンチ側が高く、とりわけＤトレンチの東端を頂点とし、北側、西側、南側に向かって低くなる。しかし、層位は安定しており、調査区内はほぼ同じ状況が認められた。

第５図はＡトレンチ北壁とＢトレンチ東壁の土層断面図であるが、基本的な層位を以下に述べる。１層は県北で広く認められる黒ボコと呼ばれる黒色土であるが、ここでは一部を除いて耕作による撹乱層である。２層は古墳の周堀内に堆積した黒色土である。３層は黄褐色を呈する軽石層で、大山の弥山パミスに対比されるが、部分的に残存するのみで、黒ボコとの間にあったと考えられる黄褐色火山灰層（ソフトローム）とともに削平されたものと思われる。５層は硬質の灰色火山砂層で、大山の上のホーキに対比される。５層は詳細に見ると色調や土質の異なる２cm前後の薄い層４枚からなっている。６層は淡茶灰色火山灰層で、軽石を多く含む。８・９・10・11層は灰色を基調とする火山砂層で、大山の下のホーキに対比される。この内10層と11層は、薄い桃色粘質砂を挟んで２ないし３層に分かれる。12層は黄色を呈する火山灰層で、姶良火山灰層に比定される。13層は淡い桃色を呈する粘質土で、この上半部に石器類を含む。



1．黒色土（耕作土）　2．黒色土　3．黄褐色軽石（弥山パミス）　4．黄褐色火山灰（ソフトローム）
5．硬質灰色火山砂（上のホーキ）　6．淡茶灰色火山灰（オドリ）　7．淡茶灰色火山砂（軽石を多く含む）
8．淡灰青色火山砂　9．淡灰黄色火山砂　10．淡灰白色火山砂と桃色粘質火山砂の互層　11．淡灰青色火山砂と桃色粘質火山砂の互層（8～11の火山砂は下のホーキに対比）　12．黄色火山灰（姶良火山灰）
13．淡桃色粘質土（石器類を含む）　14．白桃色粘質土　15．硬質灰色火山砂（下のホーキ）　16．淡白赤色粘土　17．黄褐色土　18．黒褐色土（黄色土粒含む）　19．黒褐色土（黄色土粒多く含む）
20．姶良火山灰と桃色粘質土および灰青色火山砂のブロック

第6図　土層断面（S：1/80）

第２節　先土器時代の遺構と遺物

１、遺物の分布

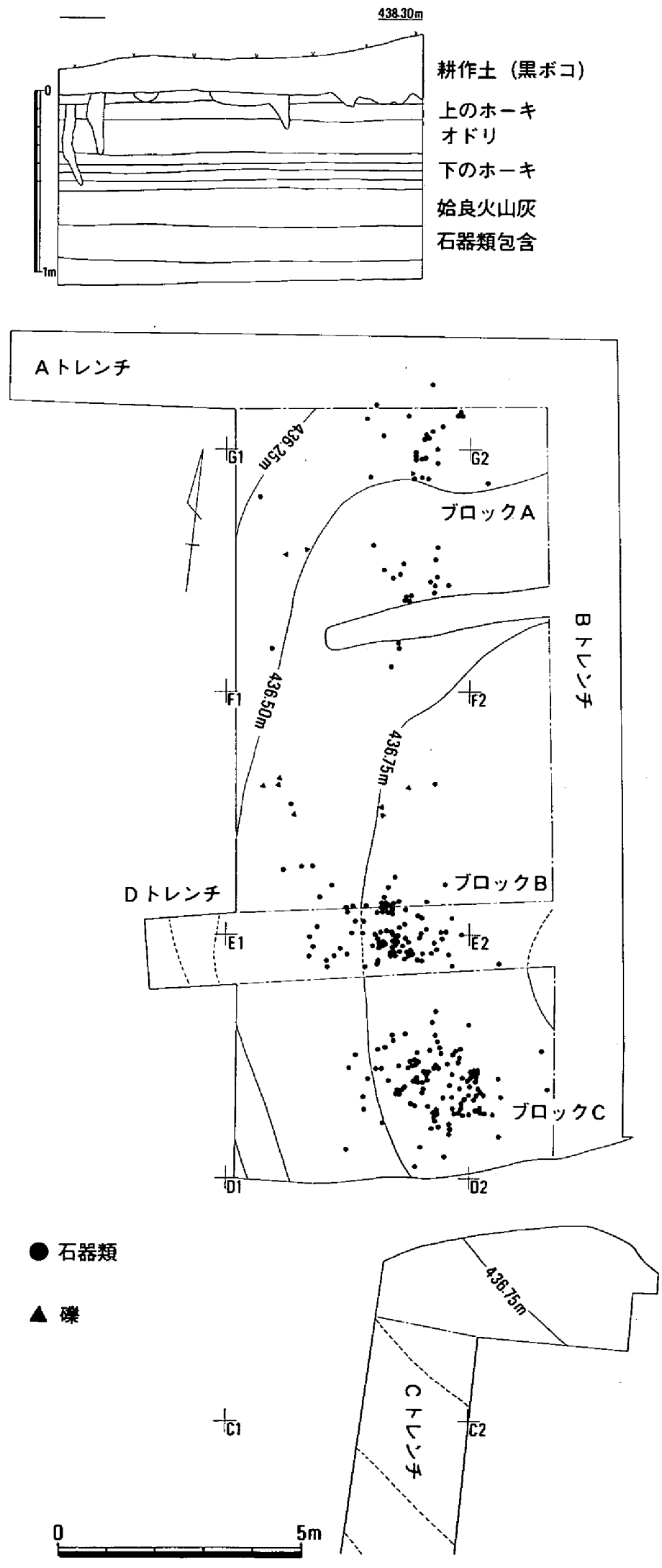
縄文時代以後の遺構調査終了後、火山灰が厚く堆積することから、先土器時代の遺構・遺物の確認を行なった。まず調査区の北端にＡトレンチを設定し、16層まで掘り下げた結果、東寄りの場所で姶良火山灰の直下から石英製の石核が１点出土した。このためさらにＢ、Ｃ、Ｄのトレンチを設定し、石器類の広がりを確認した。このうちＢ、Ｃのトレンチでは何も出土しなかったが、Ｄトレンチでは姶良火山灰層の直下から多くの石器が出土した。こうした結果から北はＡトレンチ、西は基準杭の１ライン、南はＣトレンチの北端までの範囲を、姶良火山灰層直下の遺構・遺物を対象に全面調査を行なった。

先土器時代の遺物を包含する層は淡桃色粘質土で、調査区全域に20cm前後の厚さで認められるが、この内遺物は上半部10cm程に集中しており、異なる層に移動しているものは皆無である。

石器類の平面分布を見ると、大きく３箇所のまとまり（ブロック）が認められる。各ブロックは、基準杭Ｅ２およびＦ２の東側の高い場所を取り巻くような弧を描いているように見える。

ブロックＡ

ブロックＡは調査区の北端、基準杭Ｇ２周辺からＦ２にかけて約５ｍの範囲に分布する。分布状況はやや緩慢で、Ｇ２の西側付近とＦ２に近い２つのまとまりに分けることも可能である



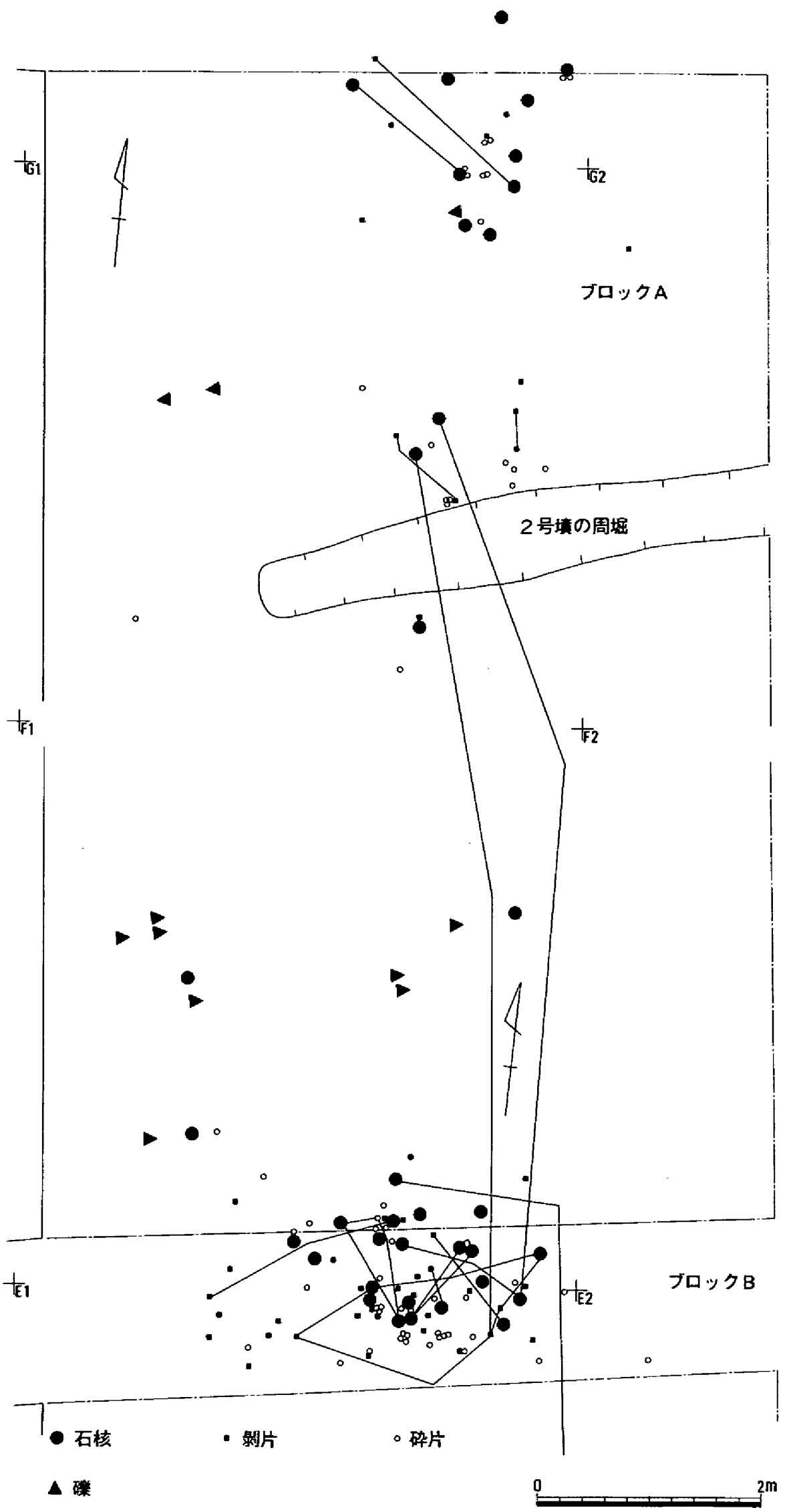
第７図　先土器時代の遺物分布（Ｓ：1/150）と出土層位

が、ここでは１つのまとまりとして捉えておく。

ブロックＡを構成する石器類は49点で、その石材はほとんど石英であるが、安山岩や頁岩も７点存在する。石器類は石核、剥片、砕片と、剥片剥離工程の各段階のものが認められるが、石器として仕上げられたものは１点もない。また、これらの石器類の多くは平坦な面で覆われていることから、打撃の際に石英に見られる多くの石理に添って割れたものと考えられる。

石器類の接合関係を見ると、２つの小さなまとまり内での接合はあるが、両者が接合することはない。しかし、南側の小さなまとまりはブロックを越え、ブロックＢと接合関係をもつ。

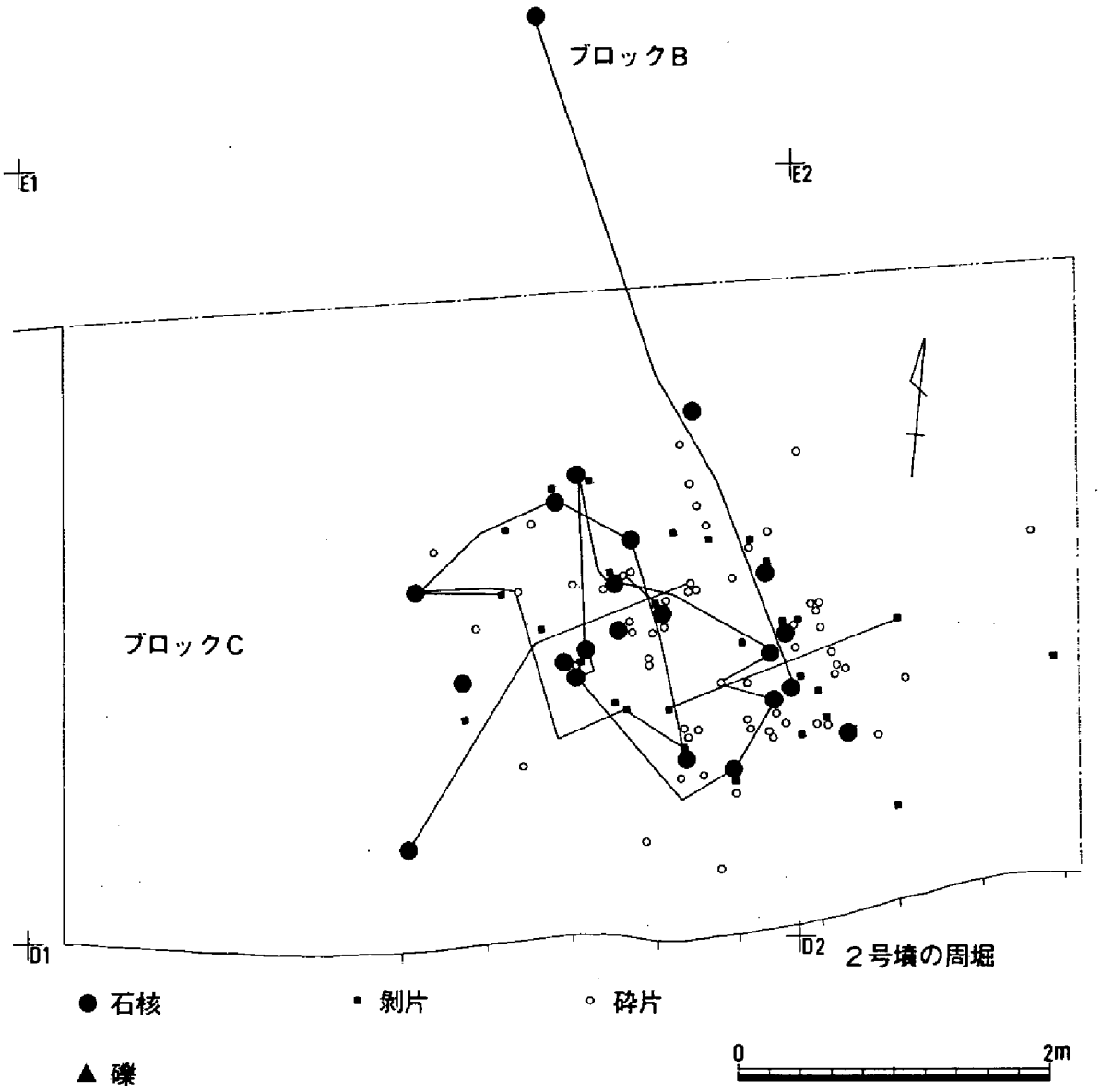
石器以外に礫が３点出土した。いずれも子供の握り拳大で、表面が赤くなっている部分が認められるが、彼熱によるものではないようである。



第８図　ブロックＡ・Ｂの石器類と接合関係（Ｓ：1/60）

ブロックＢ

ブロックＢはブロッ



第９図　ブロックＣの石器類と接合関係（Ｓ：1/60）

クＡの南側約５ｍに位置する。石器類は東西４ｍ、南北３ｍの範囲に分布し、94点確認された。石核、剥片、砕片は認められるが、石器に仕上げられたものは１点もなかった。また、そのほとんどは粗悪な石英の石理に添って割れたものである。

接合関係はブロック内で比較的多く見られるが、ブロックＡとブロックＣとの間にも認められる。

石材はほとんど石英であるが、安山岩を３点含む。

ブロックＢの北側に接して礫が８点出土した。東西４ｍ、南北２ｍ程の範囲に点在するもので、とくに集中するものはない。中には赤く変色しているものもあるが、彼熱によるものではないようである。礫の大きさはほとんどが子供の拳大であるが、１点やや大きなものがある。

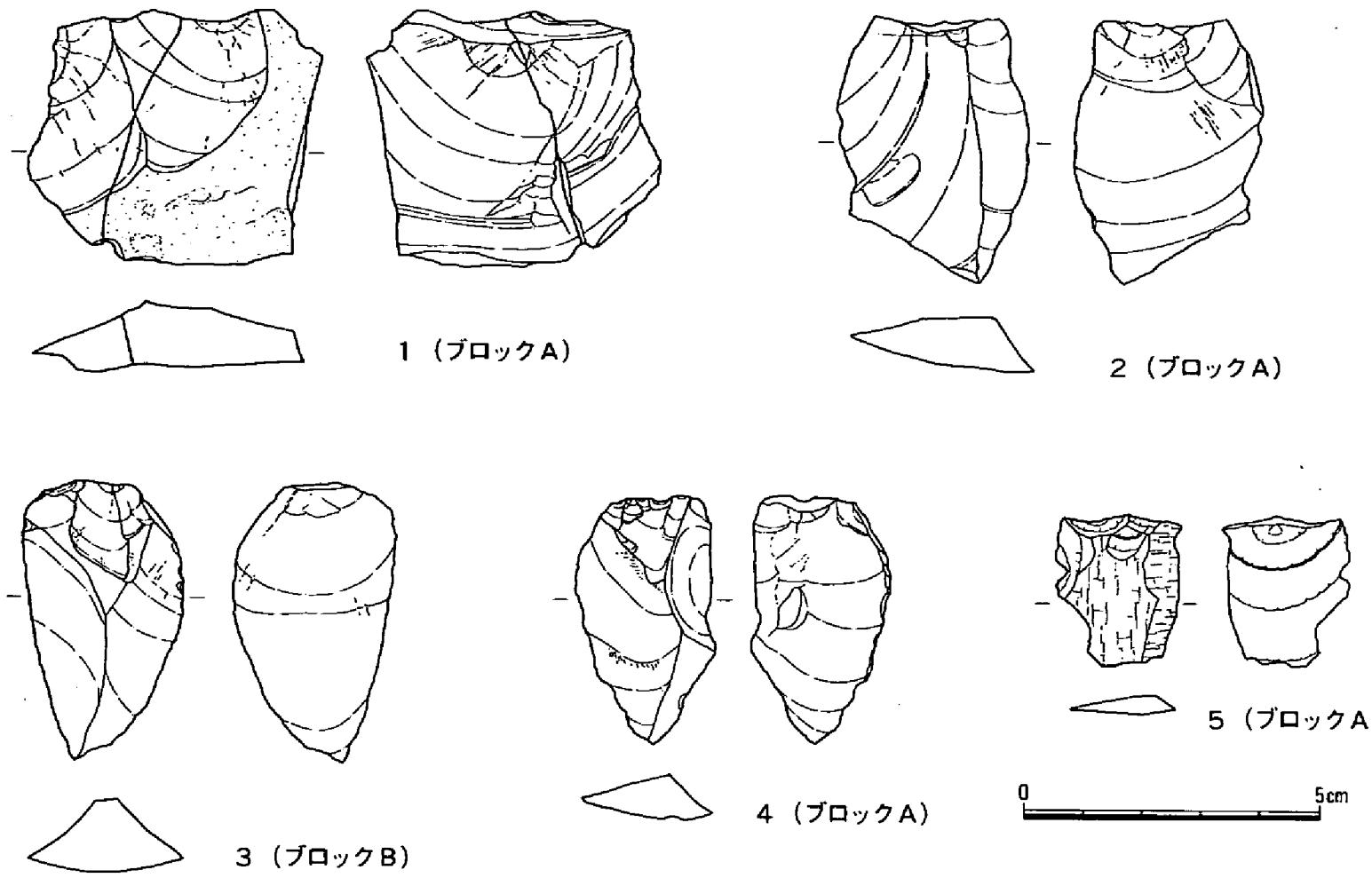
ブロックＣ

ブロックＣはブロックＢの南側４ｍに位置する。石器類の分布範囲は東西、南北とも３ｍで、111点が出土した。石器類は石核、剥片、砕片であるが、そのほとんどは粗悪な石英の石理に添って割れたもので、石器に仕上げられたものは１点もない。

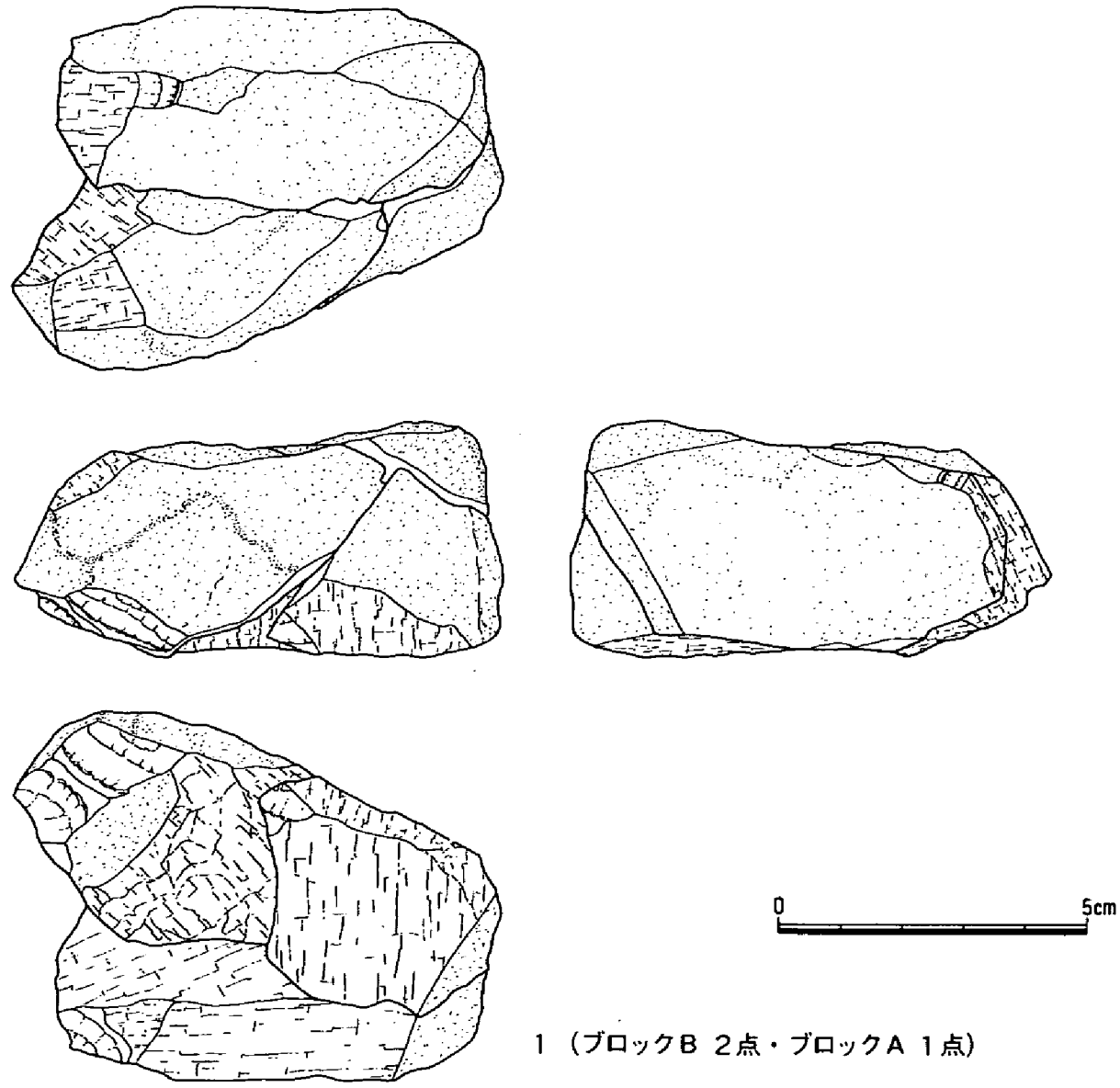
接合関係を見ると、ブロック内でまとまるものが多いが、１点ブロックＢと接合する。石材は１点安山岩が見られる以外は、すべて粗悪な石英である。

２、石器類

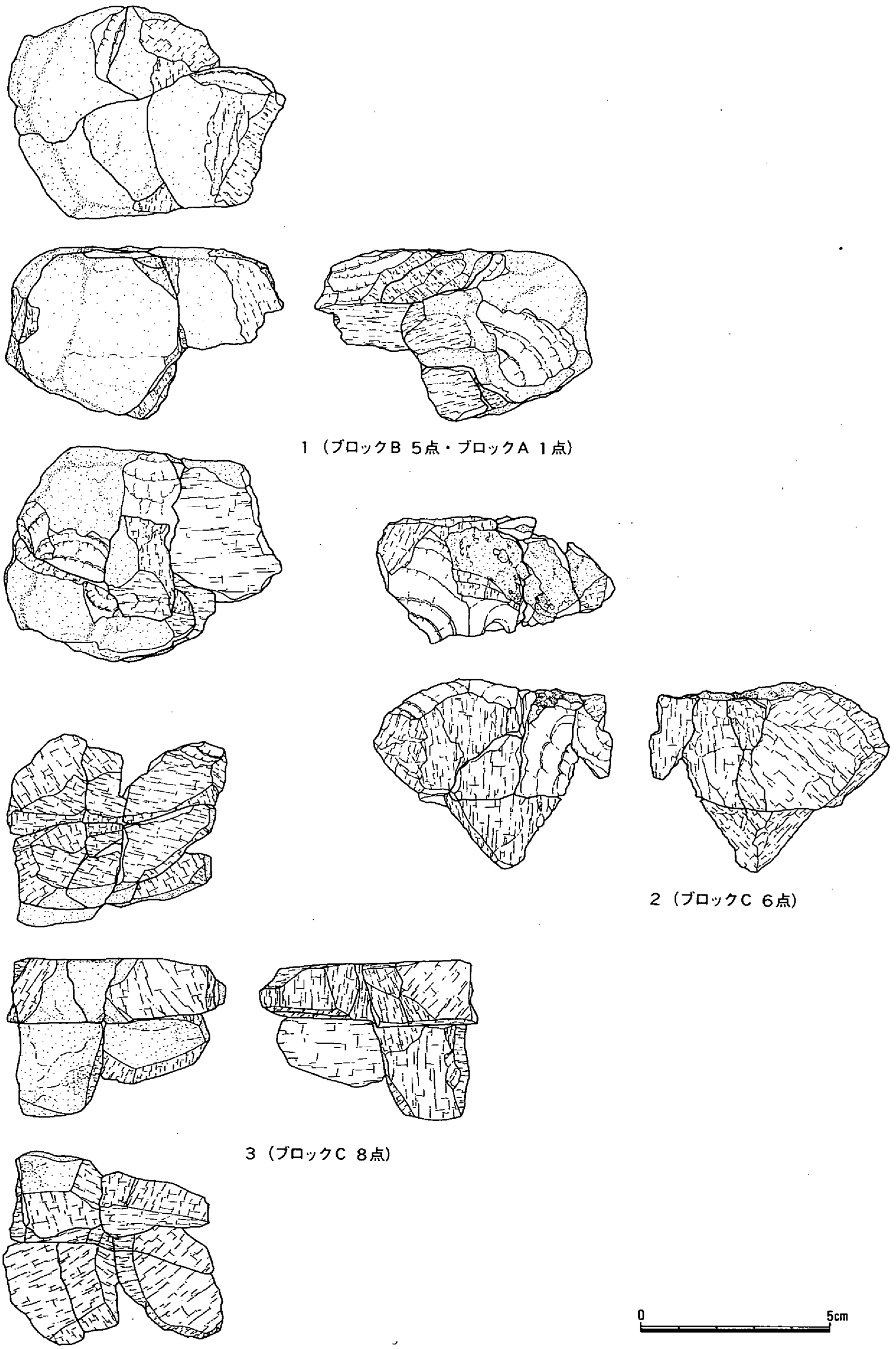
姶良火山灰層直下から出土した石器類は、石核、剥片、砕片、礫などで、石器はまったく認められなかった。大部分を占める石英の石器類は、第11・12図のような小児の握り拳大の礫を分割して剥片を剥離しようとしているが、ほとんどの場合石理に沿って弾けており、石器の素材となり得るような剥片を剥取することは困難であったものと考えられる。したがって第10図５のような石英の剥片は稀で、石器の素材となりそうな剥片はわずかに見られる他の石材を用いているが、これは他の場所で剥離されて持ち込まれたものである。第10図の剥片は１が流紋岩、２は細粒砂岩、３は流紋岩、４は頁岩と思われ、２を除いて縦長の剥片を志向している。



第10図　各ブロック出土の剥片



第11図　接合資料（1）



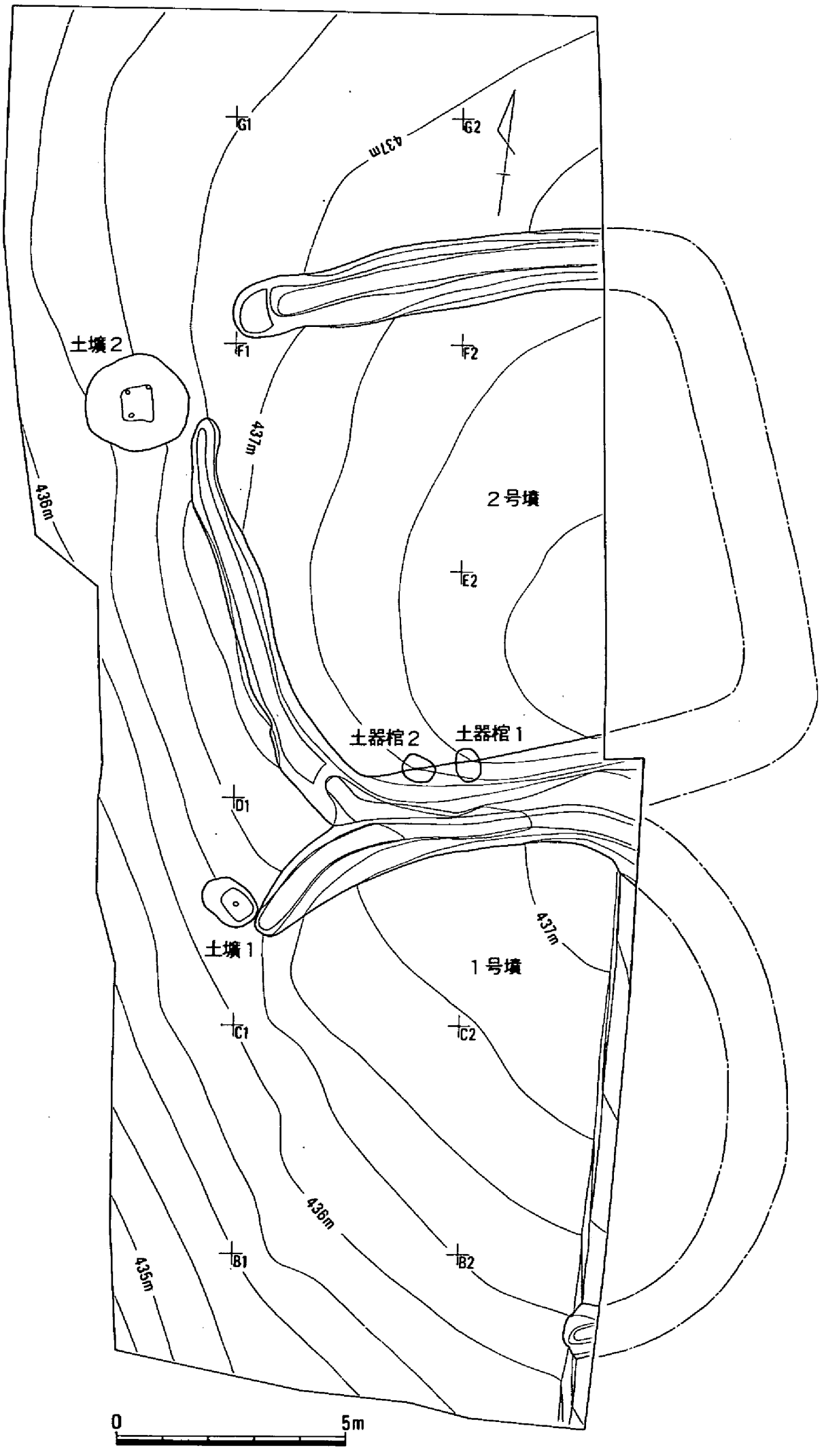
第12図　接合資料（2）

第３節　古墳時代の遺構と遺物

１、土器棺

土器棺１（第14・15図）

土器棺は本来耕作土となっている黒ボコを除去した段階で検出されるものであるが、その痕跡を認めることが出来なかった。その存在にきずいたのは、先土器時代の調査を進める過程で、ちょうど姶良火山灰層を除去する段階であった。そのため本来の掘り方を捉えることが出来なかったが、削平された２号墳の南周堀検出面から土器棺の底部までの深さは１ｍあり、さらに当時の地表面の削平を考えれば、相当深い掘り方であったことがうかがわれる。なお、土器棺と古墳の関係であるが、古墳の墳丘が削平されていたため、層位的に前後関係を確認することは出来なかったが、両者の土器を比較するかぎり土器棺のほうが古く、土器棺埋葬後、重なるように古墳が築造されたものと考

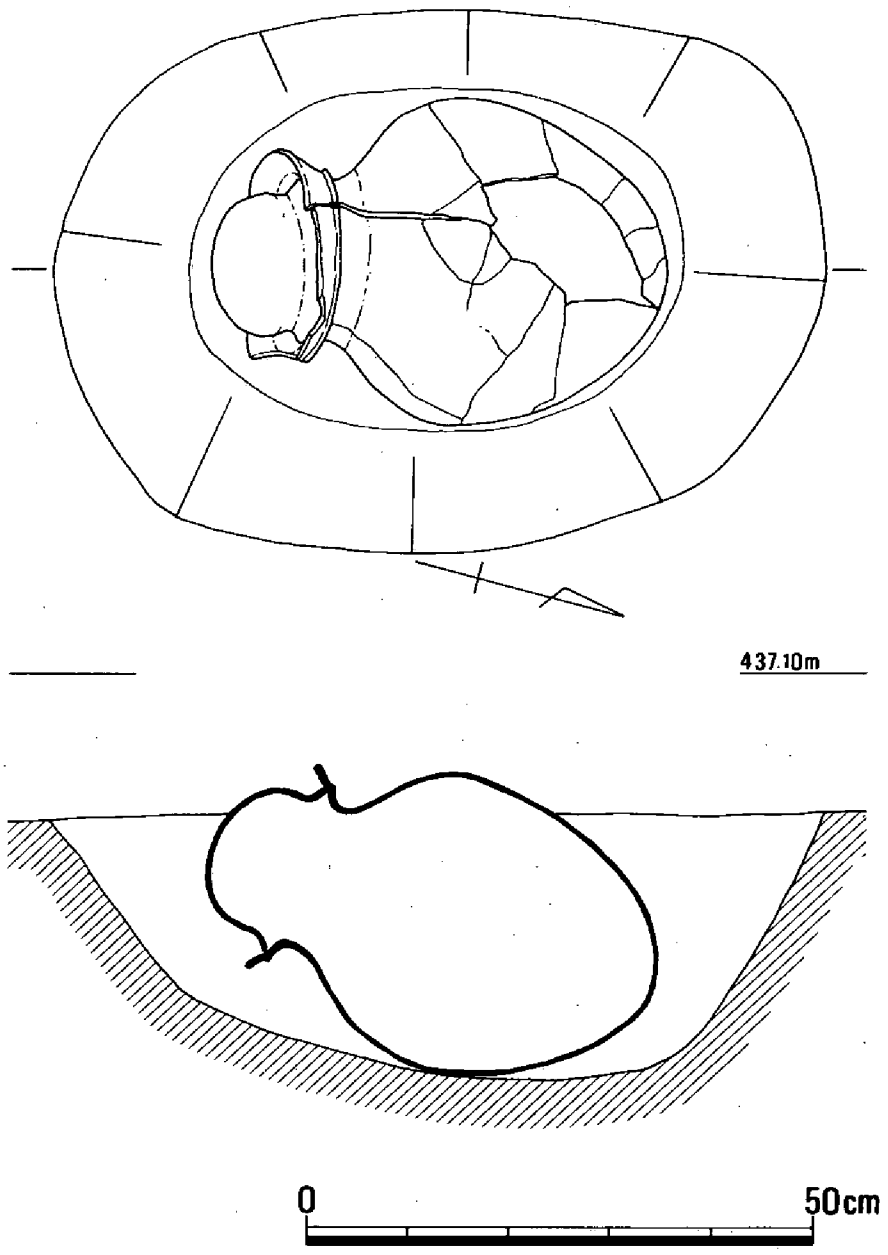


第13図　縄文時代以降の遺構配置図（Ｓ：1/150）

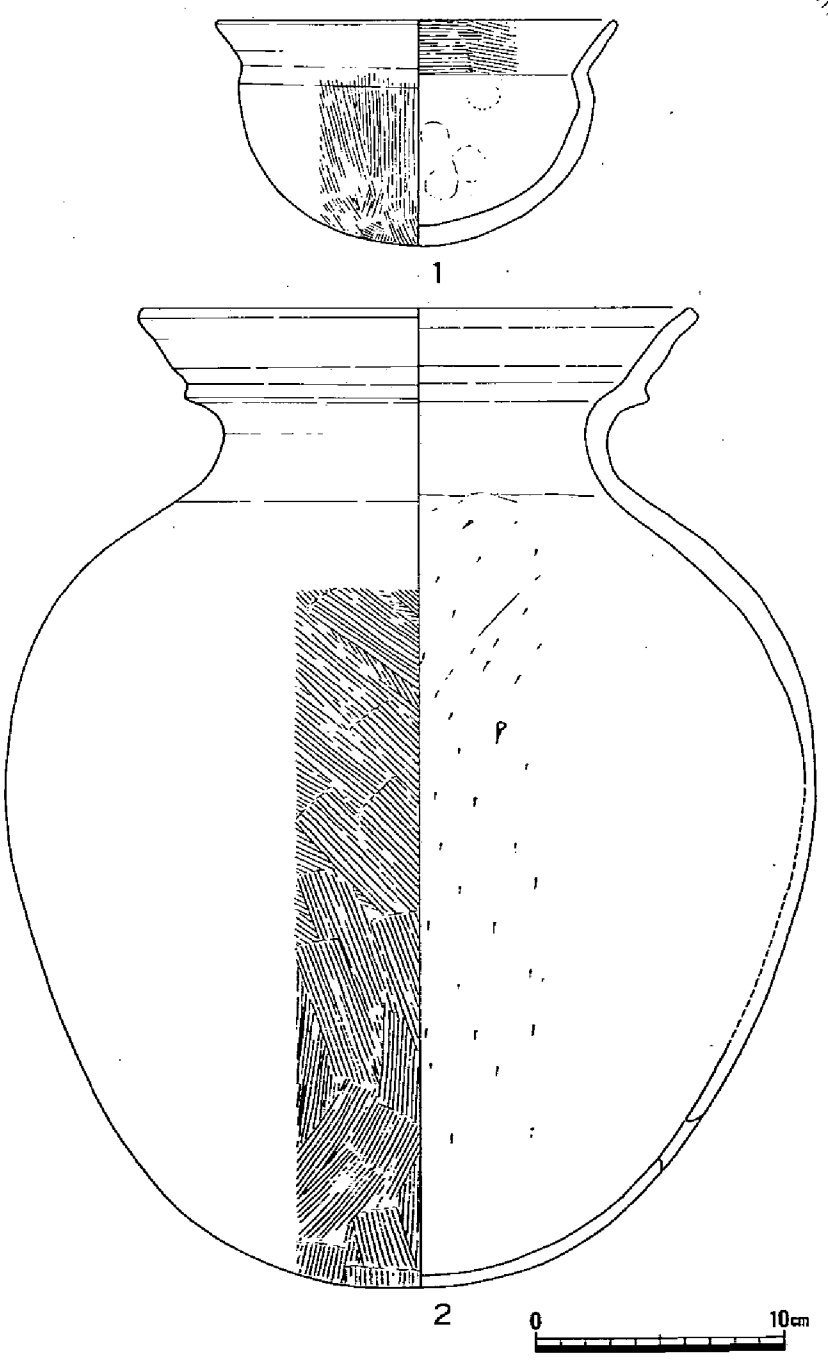
えられる。

さて、土器棺１の掘り方平面形は、長軸をほぼ南北に向ける長楕円形を呈し、壁は比較的急傾斜で立ち上がる。検出面での規模は、長さ76cm、幅53cmで、土器棺よりやや大きめの穴を穿っている。掘り方の埋土は壁となる淡桃色粘質土に極めて良く似ているが、それより粘質性が無い。何層にも及ぶ特徴的な火山灰層を掘り抜いている割りには、混じりの無いきれいな土である。

土器棺は壷の口縁部を北に向けて寝させるが、掘り方底部に胴部最大径を接着させ、底部より少し口縁部を高くし、その内側には、鉢の口縁部を入れ込むように蓋をしている。なお、棺内に遺物は認められなかった。



第14図　土器棺１の出土状態（S：1/10）



第15図　土器棺１

土器棺の身（第15図２）は器高39cm、胴部最大径32cmを測る壷である。壷は丸底で、やや長い胴部に、短い頸部から一旦強く外反し、さらに外反しながら立ち上がる二重口縁が付く。胴部下半には、焼成後に内部から打ち欠いた径２cmあまりの穴が見られる。調整は口縁部の内外面をヨコナデ、胴部外面をハケメ、内面はヘラケズリしている。

棺の蓋（第15図１）は器高９cm、口径16cmを測る小形の鉢である。鉢は底部が丸底で、椀形の胴部にくの字状に外反する口縁部が付く。調整は口縁部外面をヨコナデ、内面はハケメ、そして胴部外面をハケメ、内面はナデで仕上げている。なお、口縁部から胴部上半の外面には煤が付着している。

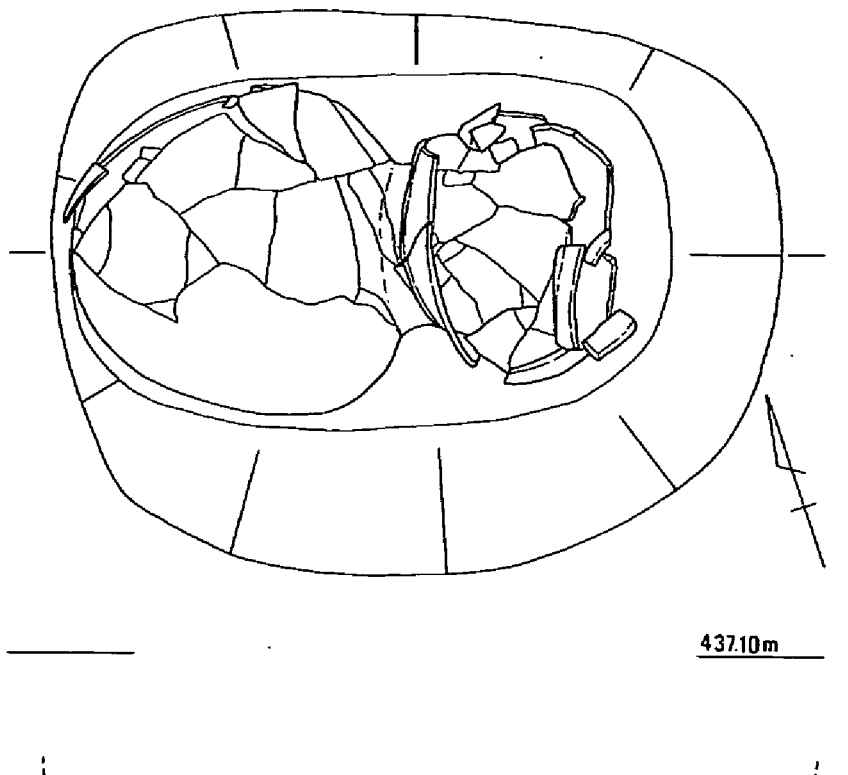
土器棺２（第16・17図）

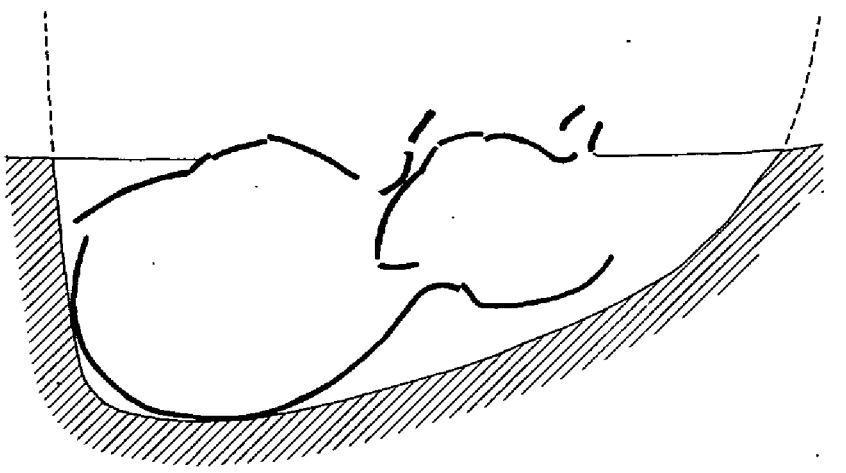
土器棺２は土器棺１の西側50cmに位置する。土器棺１同様、淡桃色粘質土上面で検出した。掘り方の平面形は、東西方向に長い楕円形を呈し、壁は急傾斜に立ち上がる。検出面での規模は長さ72cm、幅55cmを測る。掘り方の埋土は淡桃色土である。

土器棺の身には壷を用い、口縁部を東に向けて寝せているが、底部側より口縁部側をやや高くしている。壷の口縁部内側には、甕の底部側を入れ込んで蓋をしている。

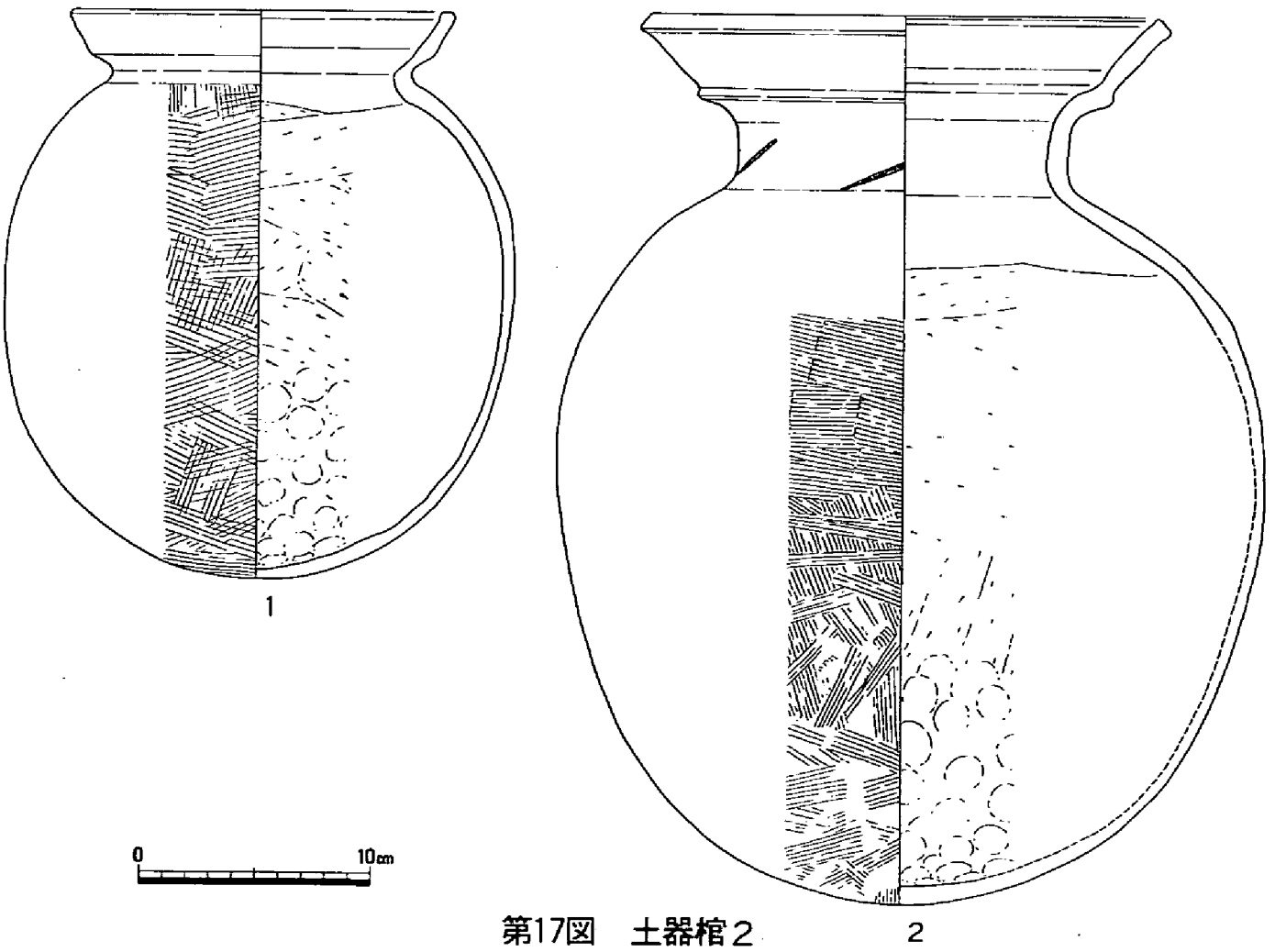
棺の身（第17図２）は器高38.5cm、胴部最大径30.9cmの壷を用いている。器形はやや長めの球形状の胴部に、ほぼ垂直に短く立ち上がる頸部から一旦強く外半させた後、さらに外反しながら立ち上がる口縁部が付く。頸部には板状の工具で斜位に刻み目をめぐらす。

蓋（第17図１）は器高24.7cm、胴部最大径22cmを測る甕である。器形は球形の胴部に、外反しながら立ち上がる二重口縁風の口縁部が付く。胴部外面には煤が付着する。

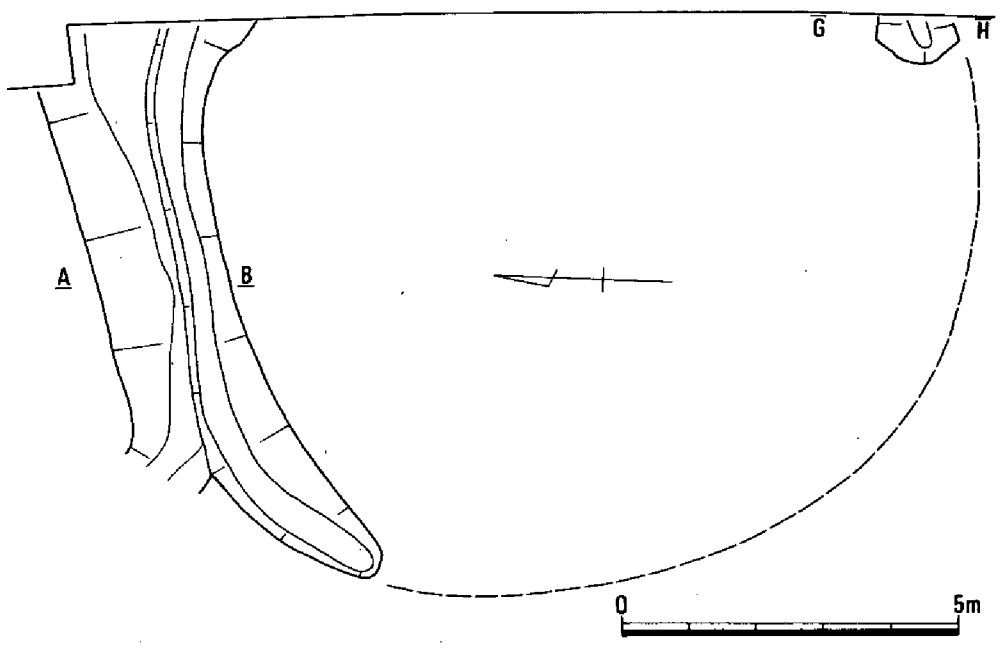




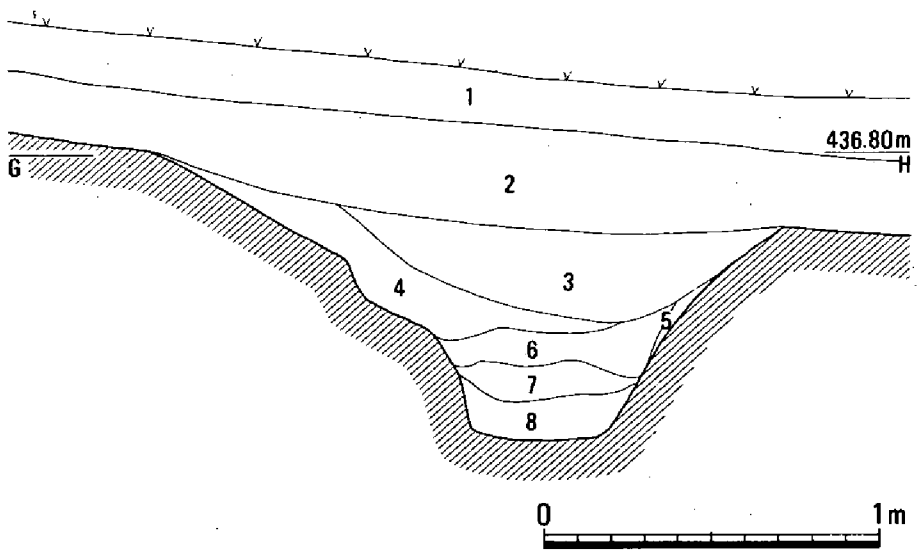
第16図　土器棺２の出土状態（S：1/10）



第17図　土器棺２



第18図　１号墳（Ｓ：1/150）



1．黒褐色土（耕作土）　2．黒色土　3．黒色土（黄色土ブロック含む）
4．黒色土と黄色土混じり土　5．灰黄色土（黒色土含む）　6．黒色土
7．黒色土（灰黄色土ブロック含む）　8．黄灰色土（灰黄色ブロック含む）

第19図　１号墳の周堀断面〈Ｇ－Ｈ〉（Ｓ：1/30）

２、古　　墳

１号墳（第18・19図）

古墳は黒褐色土（耕作土）を除去して検出を行なったが、いずれも削平が著しく、周堀が存在するのみであった。この内１号墳は姶良火山灰層まで削平が及び、周堀も一部を残すだけである。

１号墳の周堀は、北側と南東側で認められた。北側の周堀は２号墳の周堀に切られるように一部重なるが（第20図上）、東西両端は南側に弧を描いている。したがって、南東側は一部しか残存していないため明確ではないが、径11m前後の円墳ではないかと推定される。

周堀の規模は、検出面で幅180cm前後、底部の幅40cmあまり、深さ60cmを測る。

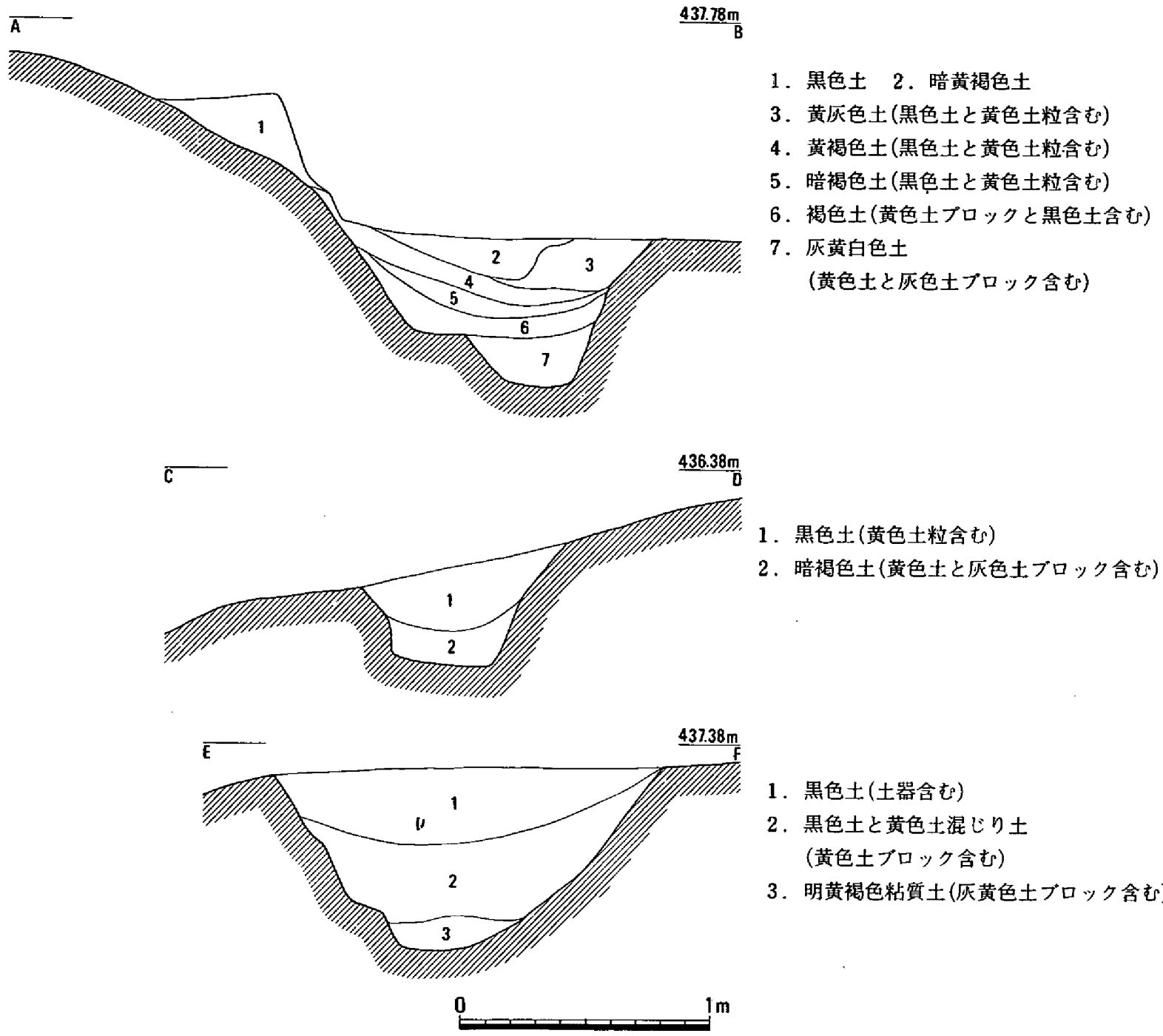
古墳の時期は、周堀のなかから遺物が出土していないため明らかにし得ないが、周堀の切り合い関係から２号墳よりは古いと思われる。

２号墳（第20～24図）

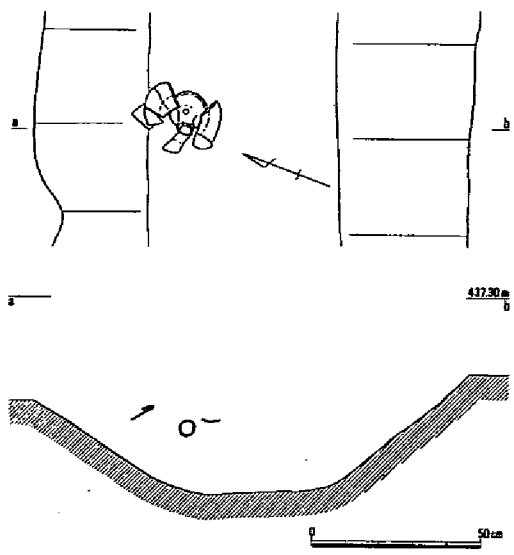
２号墳は１号墳の北側に接している。墳丘は削平されて残存しないが、三方で直線に掘られた周堀を確認したことから、一辺10mあまりの方墳である可能性が高い。

周堀は北と西と南側で確認された。北側の周堀は幅150cmで、埋土は大きく３層に分かれる（第20図の下）が、このうち１層に土器が含まれていた。西側の周堀は南側から折れ曲がって続くものであるが、北西の隅は一部途切れる。斜面部にあたるためか、周堀の幅は80cmと狭い。埋土は２層に大別され（第20図の中）、この内１層に土器が含まれていた。南側の周堀は１号墳の周堀と一部重なる。土層断面（第20図の上）を見ると６層より上が２号墳の周堀で、１号墳の周堀と考えられる７層を切っている。ただ、墳丘からの連続した断面が残っていないため、前後関係を断定するには躊躇する。周堀内の土器は、第24図の１が６層である以外は２層から出土した。なお、南側の周堀の東端は牛の埋葬による撹乱が認められたが、黒色土内であるため掘り方は明確にし得なかった。

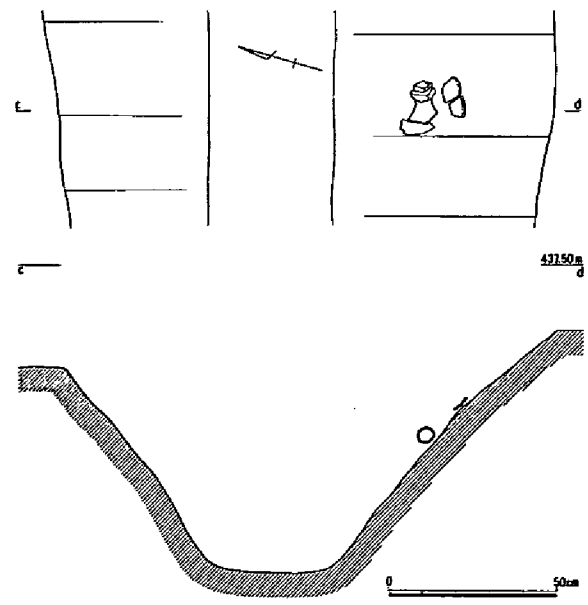
２号墳から出土した遺物は土器のみで（第24図）、すべて周堀からである。器種としては小型丸底坩が多く、ついで高杯や壷、そして甕が認められる。これらは壷を除くと完形ないし完形に近く復元できるものが多い。２・３・７・９・10は小型丸底坩で、いずれも南側周堀から出土した。概して調整



第20図　２号墳の周堀断面（Ｓ：1/30）

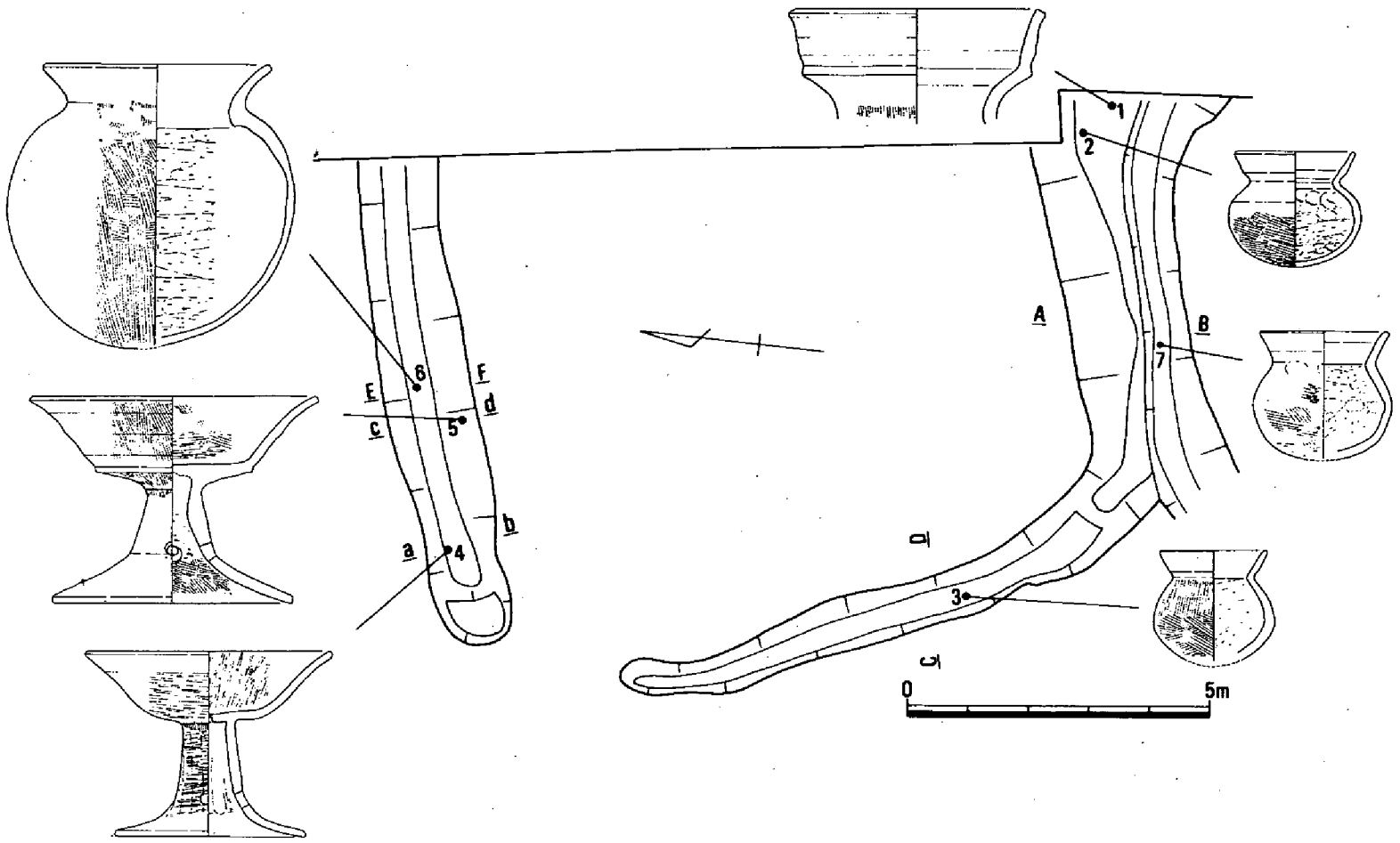


第21図　北側周堀土器４出土状態（Ｓ：1/30）

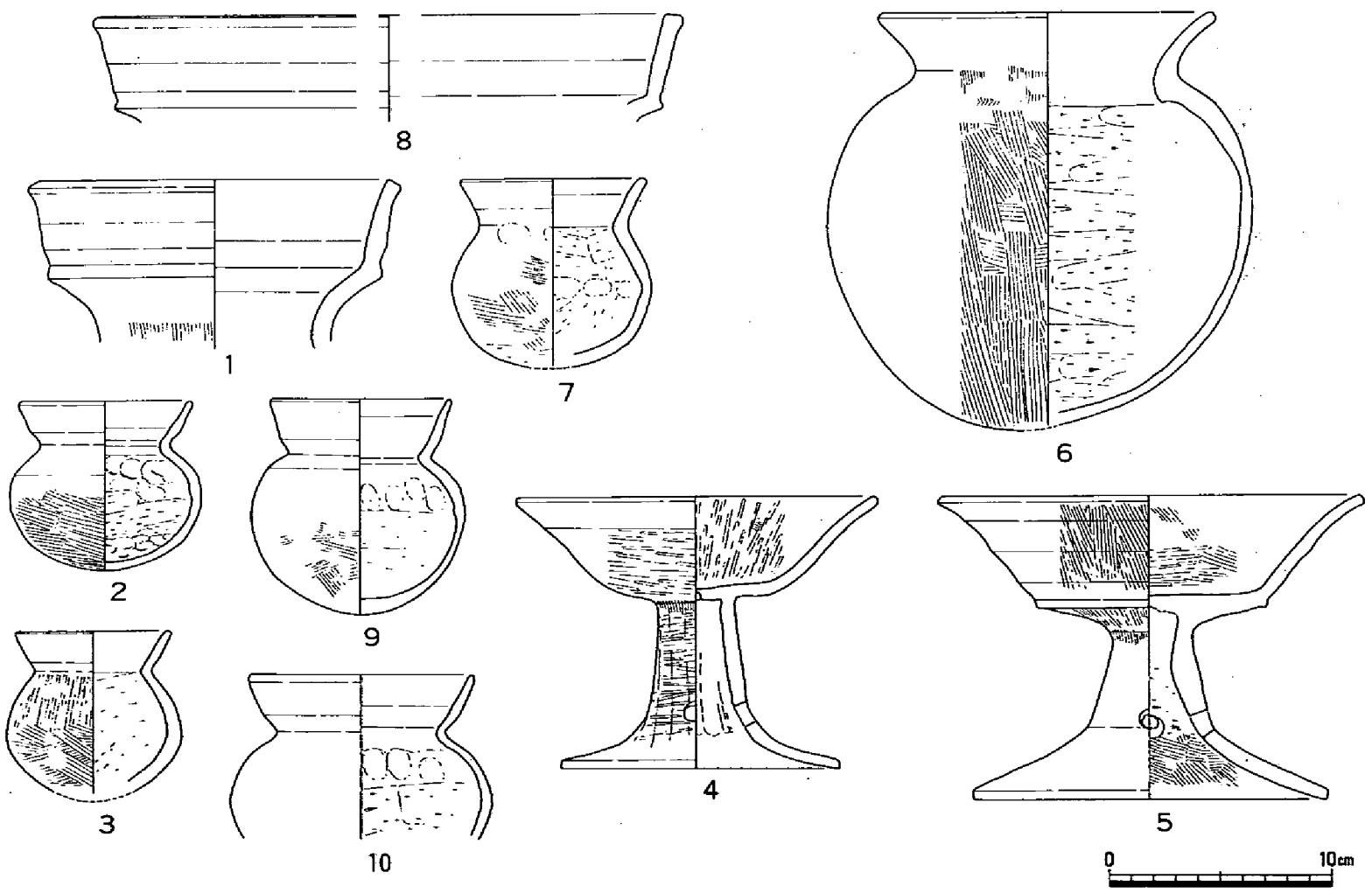


第22図　北側周堀土器５出土状態（Ｓ：1/30）

は粗雑で口縁部の内外面はヨコナデ、胴部の外面をハケメ、内面はヘラケズリである。４・５は高杯で、脚柱部下端には円孔が穿たれているが、４は３方向、５は２方向である。１・８は壷の口縁部、そして６は甕である。以上の土器から古墳の時期を推し量ると、概ね５世紀代と推定される。



第23図　２号墳出土土器分布図〈アルファベットは断面の位置〉（Ｓ：1/150）

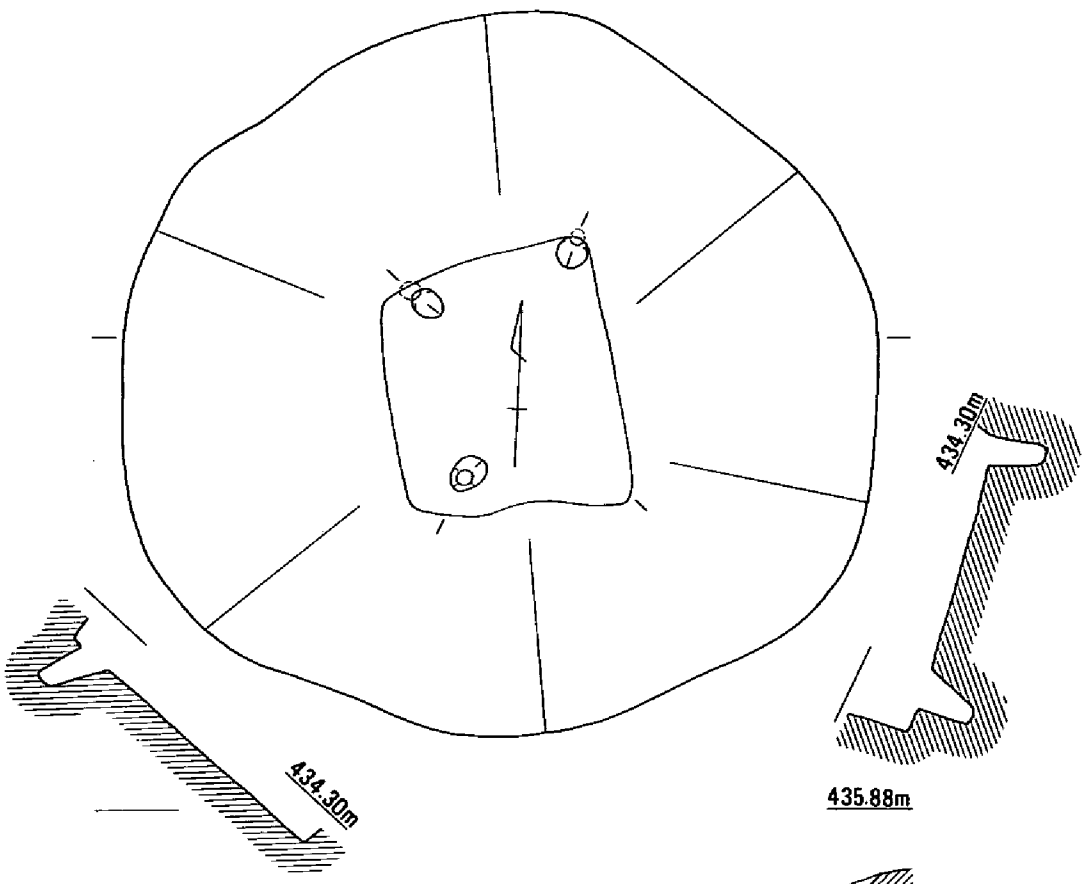


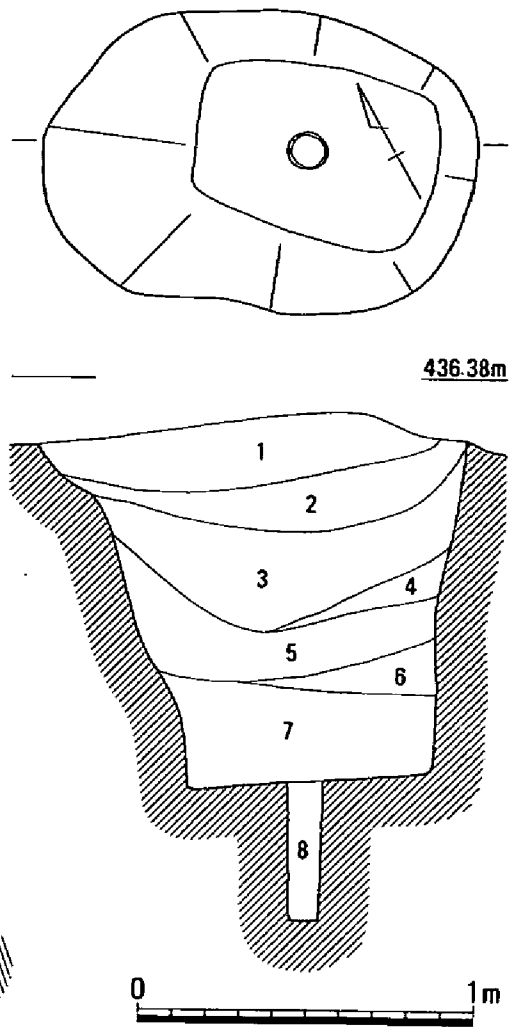
第24図　２号墳出土土器〈土器番号の１～７までは土器分布図の番号と同じ〉

第４節　時期不明の遺構

黒褐色土（耕作土）を除去した段階で、２基の土壙を検出した。土壙１（第25図）は底部中央に径10cmの穴が１本、土壙２（第26図）には底部の３隅に内傾する穴が穿たれている。

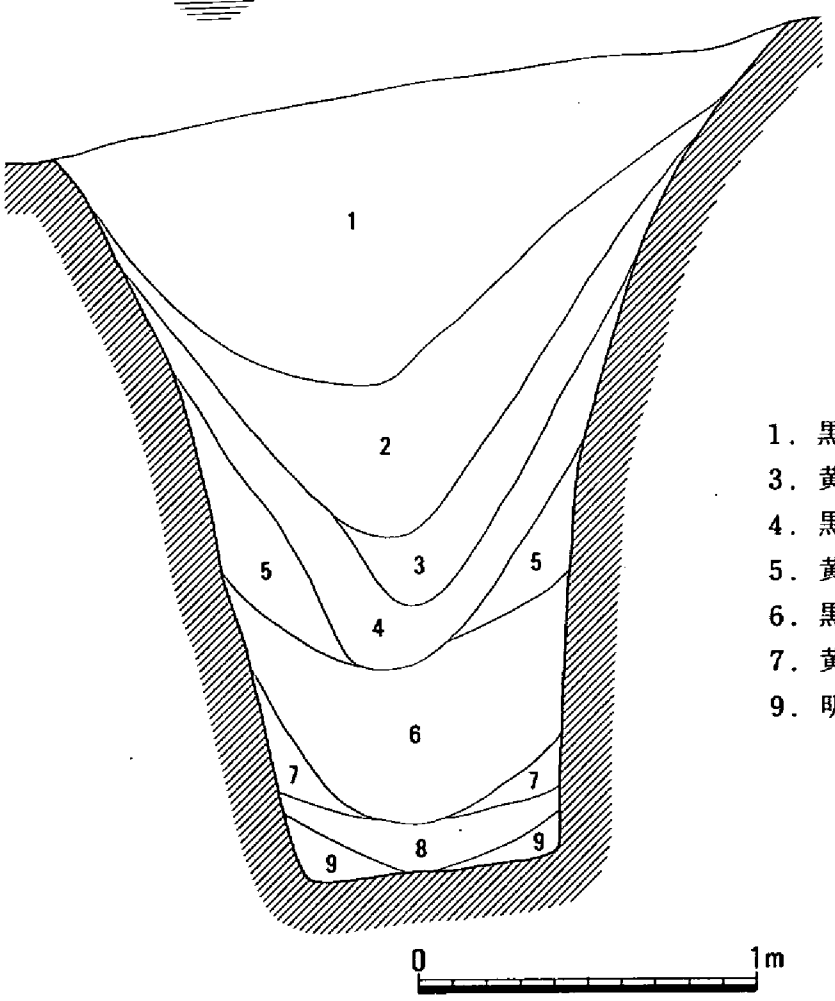
２基の土壙は落し穴と推定されている土壙に類似しており、遺物はないが縄文時代のものである可能性が強い。





1．黒色土（黄色土粒含む）
2．暗褐色土（黄色土粒含む）
3．暗黄褐色土（黒色土混じる）
4．黄褐色土と黒色土混じり土
5．黒色土（黄色土粒含む）
6．黄褐色土　7．淡黄灰白色土
8．灰白色粘質土

第25図　土壙１（S：1/30）



1．黒色土　2．黒色土（黄色土粒含む）
3．黄灰色土（黄色土ブロック含む）
4．黒色土（黄色土ブロック含む）
5．黄褐色土
6．黒色土と黄褐色土の混じり土
7．黄褐色土　8．黒色土（黄色土粒含む）
9．明黄灰色土

第26図　土壙２（S：1/30）

第5章 ま と め

先土器時代の遺構・遺物は姶良火山灰層直下の、淡桃色粘質土層中から発見された。その石器類の分布状況を見ると、ほぼ3箇所のブロック（石器類の集中地点）が認められる。3箇所のブロックは接合関係を見るとAとB、BとCのブロック間で接合が認められることから、これらの石器類はほぼ同時に残されたものと考えられる。調査範囲内で見る限り、3箇所のブロックが同時存在であるとしても、各ブロックが小さいことや石器類の総数が250点あまりであることを合わせて考えると、小さな集落、すなわち少集団による短期間の居住地であったと推定される。ただ、ブロックが丘陵の高い場所を中心に弧を描くように分布しているようにも見え、そうであるならば調査範囲の東側にもかなり広がっていることが予想されるし、また、たとえ環状に分布していないとしても、東側にも分布していることは十分に考えられる。であるとしてもさほど大きな集団とは思えないが、現状ではこれ以上の資料はなく、憶測の域を出るものではない。

では、蒜山盆地の他の遺跡ではどうであろうか。上野遺跡の北西に所在する戸谷遺跡群（註1）は、石器類の分布状況は公表されていないが、第1地点では上野遺跡とほぼ同じ調査面積で2000点以上の石器類が出ている。また、第4地点では上野遺跡の約半分の調査面積で220 点あまり、そして第5地点は上野遺跡の3倍の調査面積で1500点以上と、いずれも点数で見るかぎり相当多いといえる。

盆地の南西にある中山西遺跡、城山東遺跡、下郷原田代遺跡からも姶良火山灰層直下で石器類が出土している（註2）。このうち中山西では外側の径が14.5mの環状ブロックが1箇所認められ、石器類が1160点あまり出ている。城山東は石器類の点数は不明であるが、12×5.8mのブロックが1箇所認められる。また、下郷原田代№2地点では3箇所のブロックが発見されているが、各ブロック毎の石材が異なることおよびブロック間に接合関係が見られないことから、必ずしも同時存在とはいえない。こうしてみると中山西、城山東、下郷原田代の3遺跡は、いずれも丘陵上のかなりの広さを調査しているにもかかわらず、ブロックは少なく、かつ石器類の点数も上野遺跡ほどではないにしても少ないといえる。したがって、戸谷遺跡第1地点は調査が進めば大集落になる可能性があるものの、その他の遺跡からは少集団による短期間の居住地であった可能性が強く感じられる。

ところで、上野遺跡の石器類はほとんどが粗悪な石英であるが、僅か10点あまり、安山岩や頁岩などの異なる石材が認められた。この石英とは異なる石器類は各ブロックに数点含まれ、いずれも剝片で、それも形の整ったものであることから、他の場所で剝離して上野遺跡に持ち込んだものと考えられる。しかし、ここでも砕片が認められないことから、細部加工を施すことはなく、その一部が廃棄されたものと考えられる。

上野遺跡の石英を素材とする石器類は、完成された石器が1点もなく、ほとんどが打撃を加えた際に石理に沿って割れたものである。したがって、期待された剝片はほとんど得ることができなかったと思われ、試し割りののち移動したのであろう。蒜山盆地の姶良火山灰層下の石器群は石英（水晶）を多用しているが、それは比較的透明度の高い質の良いもので、たとえば中山西では小形のナイフ形石器を、戸谷遺跡群でもナイフ形石器を製作している。ただ、石器類の点数の割りに製品が少ないのは、石英に共通する特徴で、苦労して剝片剝離を行なっていたことがうかがわれる。

縄文時代の遺構と確実にいえるものはないが、その形態から縄文時代の落し穴と推定される土壙が２基認められた。このような遺構は、中国山地添いの丘陵上の遺跡に見られ、蒜山盆地においても中山西遺跡、城山東遺跡、下郷原田代遺跡で発見されている。蒜山盆地の３遺跡で見られる落し穴の平面形は、円形、楕円形、方形、長方形などを呈するが、底面で比較すると長方形ないし方形が６割を占め、残りは楕円形と円形が半々になる。落し穴の特徴は、壁がほぼ垂直に立ち上がることと底面に認められる穴であるが、底面の穴は１本のものが70％近くを占め、次いで穴の無いものが30％あまり、そして２本のものが僅かに認められる。上野遺跡の北側、日本海側に位置する鳥取県倉吉市の中尾遺跡（註３）では84基もの落し穴が発見されているが、ここでも１本のものが主体を占め、次いで複数のもの、そして穴の無いものは僅かで10％にも満たない。そうしてみると、上野遺跡の土壙１はもっとも典型的な落し穴であるが、３本の穴がある土壙２は少数例である。こうした形態の違いが狩猟対象の違いに起因するものであるかどうかについては定見をもち得ないが、普通の落し穴の規模が長軸1.2m前後であるのに対し、土壙２は2.2mで、しかも深さが2.3mもあることから、やや大形の獣を対象にしたとも解せる。

古墳時代の遺構は土器棺と古墳が発見された。土器棺は２基であるが、かって調査区内を開墾中にも発見されたといわれており（註４）、２基以上存在した可能性が強い。棺に転用された土器は、土器棺２の壺のように山陰側とのつながりが強いもので、青木遺跡の土器編年（註５）でⅦ期古と言われる時期、そして岡山県南部の編年では亀川上層（註６）にほぼ相当する。

古墳は開墾によって墳丘や埋葬施設は削平されていたが、周堀の存在から２基の古墳が確認された。１号墳は周堀の残りが悪いものの、北側の周堀が弧を描くことから円墳と考えた。築造時期を推定する遺物は出土していないが、２号墳との切り合い関係を見るための土層（Ａ－Ｂ）では、１号墳の周堀を２号墳の周堀が切っているように思われることから、２号墳より古いものと解せる。ただ、Ａ－Ｂの断面では上部が欠落しているため確定はできない。

２号墳は方墳で、周堀内からは土器が出土した。周堀内の土器はいずれも上部に堆積した黒色土中にあり、しかも土器１を除けば完形ないし完形に近いものである。器種は確認調査で出土したものを加えると小型丸底坩が目立って多い。これらの土器は、墳丘に並べられていたものが転落したものか、あるいは祭祀を行なったのちに置かれたものかは断定できないが、いずれにしても周堀がかなり埋没してからのことであったことを考えると、墳丘上にあったものがある段階に一斉に転落したとは考えにくく、むしろ後者である可能性が強い。周堀内から出土した土器は青木遺跡のⅦ期、百間川古墳時代Ⅲ期（註７）に属すると考えられることから、古墳が築造された時期はほぼそれに近い時期で、西側に所在する四っ塚古墳群（註８）との関係が注目される。

註

註１　鎌木義昌・小林博昭「戸谷遺跡」『岡山県史』第18巻　1986

註２　下澤公明「第二章　蒜山地域の調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』93　1995

註３　竹中孝浩ほか「中尾遺跡発掘調査報告書」『倉吉市文化財調査報告書』第69集　1992

註４　元の地権者の話によると「赤い大きな壺と小さな壺が出土した」ということであるから、おそらく土師器の壺と甕であろう。

註５　船越元四郎ほか『青木遺跡発掘調査報告書』Ⅲ　1978

註６　伊藤　晃・柳瀬昭彦ほか「上東遺跡の調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』２　1974

註7　葛原克人・江見正巳ほか「百間川原尾島遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』39　1980
註8　近藤義郎『蒜山原―その考古学的調査―』　1954
　　近藤義郎『蒜山四っ塚古墳群』　1992

土器観察表

掲載番号	遺構・土層名	種別	器種	法量（cm）			備考
				口径	底径	器高	
第3図1	確認調査№3トレンチ	土師器	小型丸底坩	8.6			胎土にほとんど砂粒を含まない
〃　2	確認調査　表採	土師器	小型丸底坩	8.8			胎土にほとんど砂粒を含まない
〃　3	確認調査　表採	埴輪	円筒埴輪？				外面の調整はタテハケ
第15図1	土器棺1	土師器	鉢	15.9		9.0	口縁部から胴部上半に煤が付着
〃　2	土器棺1	土師器	壺	22.0		39.0	胴部下半に焼成後の穿孔
第17図1	土器棺2	土師器	甕	15.7		24.7	胴部下半に煤が付着
〃　2	土器棺2	土師器	壺	19.9		38.6	頸部に刻目がめぐる
第24図1	2号墳南周堀　暗褐色土	土師器	壺	15.9			
〃　2	2号墳南周堀　黒色土	土師器	小型丸底坩	7.6		7.7	
〃　3	2号墳南周堀　黒色土	土師器	小型丸底坩	7.0			
〃　4	2号墳北周堀　黒色土	土師器	高杯	16.1	12.6	12.4	脚柱部に3方向の穿孔
〃　5	2号墳北周堀　黒色土	土師器	高杯	18.9	15.9	13.8	脚柱部に2方向の穿孔
〃　6	2号墳北周堀　黒色土	土師器	甕	14.8		18.9	胴部下半に煤が付着
〃　7	確認調査　2号墳南周堀黒色土	土師器	小型丸底坩	8.0			
〃　8	2号墳南周堀	土師器	壺　？				
〃　9	2号墳南周堀　黒色土	土師器	小型丸底坩	8.2		9.5	確認調査№3トレンチ土器と接合
〃　10	2号墳南周堀　黒色土	土師器	小型丸底坩	10.2			

報 告 書 抄 録

ふりがな	しもながたうえのこふんぐん・うえのいせき
書名	下長田上野古墳群・上野遺跡
副書名	一般国道313号犬挟峠道路改築工事に伴う発掘調査
巻次	
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	103
編集者名	平井　勝
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター
所在地	〒701－01　岡山県岡山市西花尻1325－3　TEL　086－293－3211
発行機関	建設省中国地方建設局倉吉工事事務所 岡山県教育委員会
所在地	〒682　鳥取県倉吉市福庭418－2　TEL　0858－26－6221 〒700　岡山県岡山市内山下2－4－6　TEL　086－224－2111
発行年月日	1995年11月30日

ふりがな	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
下長田上野古墳群 上野遺跡	岡山県真庭郡 八束村下長田 字ウエノ	588		35 17 35	133 44 21	19950406 ～0509	361㎡	一般国道313号犬挟峠道路改築工事に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
下長田上野古墳群 上野遺跡	集落	先土器	ブロック　3	石器類、埴輪、土師器	姶良火山灰層直下から石器出土
	墓	縄文？	土壙　2基		
	古墳	古墳	土器棺　2基 古墳　2基		

１．遺跡の遠景
（南西から）

２．作業風景
（南東から）

３．Ｂトレンチ東壁
の土層
（西から）

図版２

１．ブロックＡの
石器類出土状況
（北から）

２．ブロックＢの
石器類出土状況
〈手前側〉
（北西から）

３．ブロックＣの
石器類出土状況
（東から）

１．土器棺１出土
状況
（東から）

２．土器棺２出土
状況
（南から）

３．１号墳全景
〈手前の穴は
土壙１〉
（西から）

図版４

１．２号墳全景
〈右側の穴は
土壙２〉
（北から）

２．２号墳の南側周
堀断面〈Ａ－Ｂ〉
（西から）

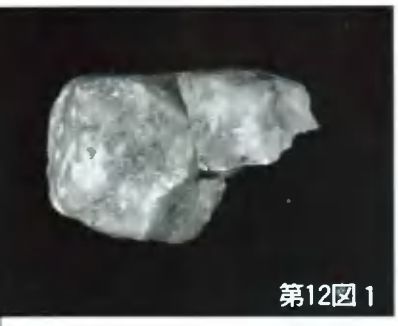
３．２号墳の西側周
堀断面〈Ｃ－Ｄ〉
（南から）

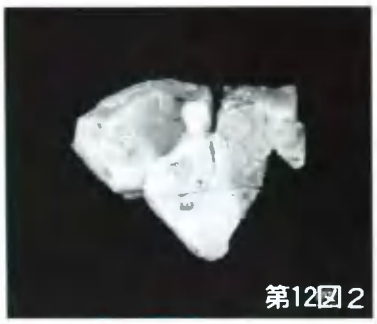
1．２号墳の北側周
堀断面〈Ｅ－Ｆ〉
（西から）

2．土壙１
（南から）

3．土壙２
（西から）

図版６

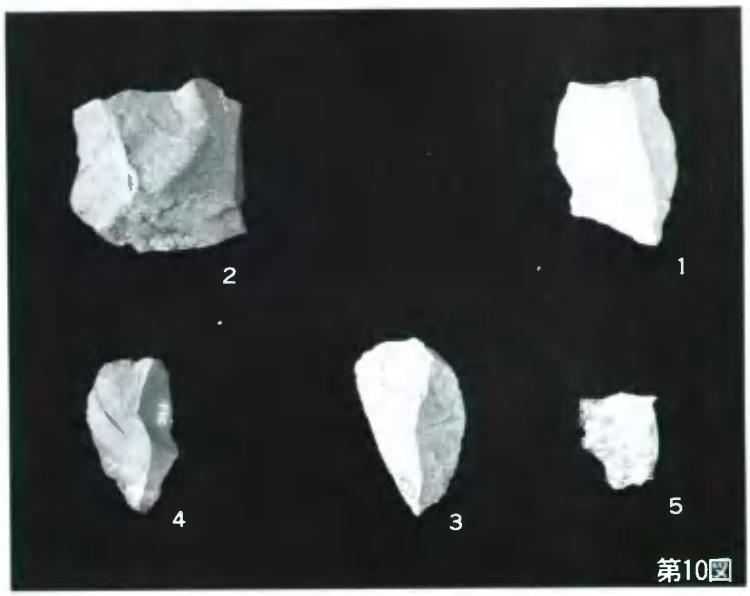

第12図１


第12図２

第12図３

第11図１

１．姶良火山灰層直下の石器類



第10図

２．ブロックＡの石器類

３．ブロックＢの石器類

１．ブロックＣの石器類

２．土器棺１〈上は蓋、下は身〉

３．土器棺２〈上は蓋、下は身〉

図版８

1

2

3

4

5

２号墳の周堀内出土土器
〈番号は第24図の土器番号と同じ〉

6

7

8

9

10

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告103

下長田上野古墳群・上野遺跡

一般国道313号犬挟峠道路
改築工事に伴う発掘調査

1995年11月25日　印刷
1995年11月30日　発行

編　集　岡山県古代吉備文化財センター
岡山市西花尻1325－3
発　行　建設省中国地方建設局
倉吉工事事務所
鳥取県倉吉市福庭418－2
岡山県教育委員会
岡山市内山下2－4－6
印　刷　西日本法規出版株式会社